

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月七日

八九四

首缺、一同裝束調進人事以下
乃とのくに土田庄 文和二年八月十一日
條々委細承候、悦入候、元應元年八月十四日

〔記錄異同考〕

部之

光嚴院宸記

光嚴院御記

一冊

元弘二年 正平二

御即位部類

野宮

一冊

元弘二年 三ノ九、二ノ廿六、三ノ廿二

光嚴院殿御記 玄象牧馬事

伏見宮御記 錄六所收

一卷

元弘二年 五ノ二、五ノ十三、五ノ十四

三條西裝束抄

一冊

正慶元年 十一ノ十三

〔光嚴院宸影〕

照寺所藏

丹波州桑田郡山國庄大雄山常照禪寺
開山光嚴院太上法皇無範和尚

御製親贊

御製親贊

謝有爲報披無相衣、經行坐臥、千佛威儀、

前天龍周郁焚香拜贍

印 印

欽奉聖旨贊光嚴院御眞

妙葩眞贊

〔智覺普明國師語錄〕

佛祖贊

欽奉聖旨贊光嚴院御眞

人中至尊、法中希有、瞻之仰之、泰山北斗、

〔愚管記〕

十六 應安五年七月廿日、乙丑、晴陰不定、新院御幸、伏見大光明寺、

○中 新院令奉拜光嚴院御影給、

略

〔愚管記〕

二十 永和四年二月十五日、戊申、晴、詣安樂光院、奉拜佛舍利、依爲

齋食、受八齋戒、被授淨上人、新造坊、被奉案光嚴院御影、并舊院共畫圖、御影、今

日始拜見之、

〔迎陽記〕

○德川昭 七月廿四日、晴、當番之間、參內、今夜祇候、今出川大納言

參會、數刻雜談、典侍局相語云、法皇御事後、至今日御轉談法華經一部云云、御

辛身御心苦之由被申之、

八月六日、晴、余參內芝禪尼參候間、對面、被語云、每日妙典一部御轉讀、其餘暇

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月七日

八九五

典侍局每
一日法華經
讀一部ヲ轉
芝禪尼舊
院ノ御筆
ヲ翻シ梵

安樂光院
ノ宸影
御法體ノ
宸影

大光明寺
ノ宸影

周郁拜贍

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月七日

八九六

翻舊院御筆、被遊梵網經并阿彌陀經云々、御勤行無他事云々、略下

〔智覺普明國師語錄〕

拈香 就等持寺恭爲光嚴院

此香、群有太祖、萬物根源、金枝玉葉、覆蔭乾坤、恭惟、尊儀天地之量、日月之明、處清淨無爲之宗、行皇極大中之道、濟世塗炭、立傳萬國之歡聲、施惠溫良、常恐一夫之不獲、仁心推在民腹、睿智元稟天資、海內仰何言之行、天下沐無私之化、有機之暇、古誥照心、一指之禪、言外領意、受勅護法、則不忘如來金言、建寺度僧、則敲出達磨骨髓、一朝脫屣寶位、遂見易服桑門、出爲世間最尊、退現法中希有大入具大見、大智發大機、云呼虎錫入深、以甘龍孟汲澗、率身示四姓、同稱釋氏、立志在三世了達導師、豈料仙夢回鈞天、忽使蒼生哭諒闇、只如今日共爲尊儀作大佛事、且淨智莊嚴一句作麼生道、挿香 梅檀葉々古風清、吹落人間香馥郁、

〔龍涎集〕

上 光嚴院御忌拈香

法王大寶、自然而至、天上人間、無物可比、大日本國山城州靈龜山天龍資聖禪寺、山門今月初七日、伏值光嚴院聖忌、預於初一日、虔就聖廟、尊前開啓、追嚴道場、合山清衆、逐日六時輪番、披閱毘盧法寶大藏經、今當漏散、嚴備香華、燈燭、茶菓珍饈、以伸供養、同音諷誦、大佛頂萬行首楞嚴神呪次、住持傳法沙門某甲、謹

薰寶香於御爐、供養三世十方佛陀耶衆、十方三世達磨耶衆、十方三世僧伽耶衆、本師釋迦牟尼大覺世尊、現座道場、當來導師彌勒世尊、書虛空偏界一切賢聖、奉莊嚴仙駕者也、伏願、神祇與法界含生、同成妙果、入神通大光明藏、光嚴住持、共惟、陛下現梵王身、居人王位、靈機密運、廓清魔孽之封疆、寶印高提、不承祖宗之神器、百姓咸歌虞舜唐堯、四海再遇天曆延喜、鳳闕行儉、茅茨不剪、彩椽不削、下視漢宮阿房甘泉、龜山開基、蘭若以扃、叢林以興、幻出天界夜摩都史、化權已周、聖駕登霞、日月易移、共遇御忌、其與追慕、視羹視墻、曷若致誠崇成、佛妄破一微塵出大經、万象同宣第一義、真機普應大三千、一超直入如來地、

光嚴院御忌拈香 自初一日逐日至七日、看閱大藏經、散忌佛妄、

毘盧有師、一切智是无師智、聖人無己、百姓心即自己心、所以一天仰瞻衆星之月、四海渴望旱天之霖、萬乘天子尊位一朝付脫屣、無上法王寶地億劫側布金、仙駕不返、御忌斯臨、五千經卷轉轉々、六時香火漏沈々、追嚴以无怠、豈不協叡襟、伏願、不動龜山寂場、刹々利濟濁世群類、不忘鷲嶺付囑、生々加護古佛叢林、

○連句會ヲ催サル、コト、元亨元年七月七日ノ條ニ、史記五帝本紀ヲ讀ミ給フコト、同年十月是月ノ條ニ、御願文ヲ後鳥羽院ノ御影堂ニ納

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月七日

八九七

メ給フコト、建武元年六月七日ノ條ニ、光明天皇ト共ニ、直義ノ第二幸シ給フコト、曆應元年三月九日ノ條ニ、琵琶灌頂ヲ藤原孝重ニ受ケ給フコト、同年五月十九日ノ條ニ、梅尾ニ幸シ給フコト、同年十月八日ノ條ニ、山城北白川吉田ノ火災ニ臨ミ給フコト、康永元年三月二十日ノ條ニ、南禪寺ニ幸シ給フコト、同二年五月是月ノ條ニ、萩原殿ニ幸シ、禮記中庸ノ談義ヲ聽キ給フコト、同三年十月二十一日ノ條ニ、御不豫ノコト、同年十二月九日ノ條ニ、洞院公賢等ニ勅シテ、諸人ノ詠歌ヲ執進セシメ給フコト、貞和元年四月十七日ノ條ニ、伏見天皇ノ聖忌ニ依リ、安樂院ニ幸シ給フコト、同年九月三日ノ條ニ、洞院公賢等ニ、七夕百首和歌ヲ詠進セシメ給フコト、同二年四月二十六日ノ條ニ、中原師治ヲシテ、禮記ヲ講ゼシメ給フコト、同年閏九月二十六日ノ條ニ、天龍寺、西芳寺ニ幸シ、花ヲ賞シ、舟ヲ泛ベ給フコト、同三年二月三十日ノ條ニ、御不豫ニ依リ、御前評定ヲ停ムルコト、同年三月十一日ノ條ニ、石清水八幡宮ニ幸シ給フコト、同年四月十九日ノ條ニ、廣義門院ト共ニ、北山第二幸シ、公衡ノ三十三回忌佛事ヲ修シ給フコト、同年九月二十四日

ノ條ニ、持明院殿新宮ニ神樂ヲ催サセ給フコト、同年十二月二十五日ノ條ニ、法華懺法ヲ持明院殿ニ修シ、後伏見天皇ノ冥福ヲ薦メラレ、又深草法華堂ニ幸シ給フコト、同四年四月五日ノ條ニ、安樂光院阿彌陀講ニ幸シ給フコト、同年六月八日ノ條ニ、萩原殿ニ幸シ、花園法皇ト立坊ノ事ヲ議シ給フコト、同年九月五日ノ條ニ、御湯治アラセラル、コト、同五年十月十一日ノ條ニ、長講堂御幸ニツキ、洞院實夏ノ私車ヲ召サセ給フコト、觀應元年八月十八日ノ條ニ、竹林院及ビ長講堂ニ幸シ給フコト、同年九月十八日ノ條ニ、泉涌寺全皎ニ戒ヲ受ケ、同寺ノ佛舍利ヲ觀給フコト、同年十二月八日ノ條ニ、光明上皇ト共ニ、御佛名ヲ新御所ニ行ハセラル、コト、同月二十七日ノ條ニ、疎石ヲ召シテ法談ヲ聽キ給フコト、同二年三月十一日ノ條ニ、疎石ニ、夢窓正覺心宗國師ノ號ヲ賜フコト、同年八月十五日ノ條ニ、天龍寺ニ幸シ、疎石ノ疾ヲ視給フコト、同年九月七日ノ條ニ、光明法皇、崇光上皇ト共ニ、賀名生ヨリ河内金剛寺ニ幸シ給フコト、文和三年三月二十二日ノ條ニ、光明法皇ト共ニ、金剛寺觀藏院禪惠ヲシテ、般若心經祕鍵ヲ講ゼシメ給フコト、同

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月七日

九〇〇

年九月十一日ノ條ニ花園天皇七回御忌ニ徽安門院ト共ニ法華經品
要文ヲ題トシ歌ヲ諸人ニ徵シ給フコト同年十一月十一日ノ條ニ痘
ヲ患ヒ給フコト延文二年四月六日ノ條ニ光明法皇ト共ニ伏見雲居
庵ニ於テ疎石ノ七年忌佛事ヲ行ハセ給フコト同年九月三十日ノ條
ニ御惱平癒アラセラルコト同三年十月二日ノ條ニ法隆寺高野山
吉野ニ幸シ給フコト貞治元年九月一日ノ條ニ伏見御領ニ付キ崇光
上皇ニ置文シ給フコト同二年四月八日ノ條ニ見ユ

〔參考〕

光嚴院

〔山城名勝志〕

紀伊郡 光嚴院 或云元在伏見城山

藤杜ノ東
西福寺

〔山州名跡志〕

紀伊郡 光嚴院 在伏見與略中按に伏見の地勢如云上於
當所與と云んは墨染より東城山の外更無隱隈地其所は皆古城の界内に
して其名亡滅する歟一説彼院他に移す今藤杜東西福寺是也と

山國莊

〔丹波山國莊由緒書〕

光嚴院太上法皇御即位元弘二壬申年三月廿二日南
朝々延文二年還幸之後右之御由緒ヲ以此莊ニ入御被爲成候其砌者兵亂
之節故參仕之公卿殿上人ニ無之御不都合之折柄此莊ニ往古々田地拜領

光嚴天皇御水像

丹波常照寺所藏



原寸 身長一〇四五

年九月十一日ノ條ニ花園天皇七回御忌ニ徵安門院ト共ニ法華經品
 要文ヲ題トシ歌ヲ諸人ニ徵シ給フコト同年十一月十一日ノ條ニ痘
 ヲ患ヒ給フコト延文二年四月六日ノ條ニ光明法皇ト共ニ伏見雲居
 庵ニ於テ疎石ノ七年忌佛事ヲ行ハセ給フコト同年九月三十日ノ條
 ニ御惱平癒アラセラルトコト同三年十月二日ノ條ニ法隆寺高野山
 吉野ニ幸シ給フコト貞治元年九月一日ノ條ニ伏見御領ニ付キ崇光
 上皇ニ置文シ給フコト同二年四月八日ノ條ニ見ユ

〔参考〕

〔山城名勝志〕

紀十六 光嚴院 或云元在

〔山州名跡志〕

紀十三 光嚴院 在伏見與略中按に伏見の地勢如云上於

藤杜ノ東
西福寺

山國莊

當所與と云んは暴染より東城山の外更無隱隈地其所は皆古城の界内に
 して其名亡滅する歟一説彼院他に移す今藤杜東西福寺是也と

〔丹波山國莊由緒書〕

光嚴院太上法皇御即位元弘二壬申年三月廿二日南
 朝々延文二年還幸之後右之御由緒ヲ以此莊ニ入御被爲成候其砌者兵亂
 之節故參仕之公卿殿上人モ無之御不都合之折柄此莊ニ往古々田地拜領



光嚴天皇御木像

丹波常照寺所藏

原寸 身長一〇四五

山國ハ法
皇ノ勅稱

僧名定メ
ハ當日タ
ルベシ

宮内卿信
兼ノ觸文

之仕居候四里之人之長莊司某与申者、山國、乍恐日夜奉御附添、御奉公相勤、御餉之供御并御清所ヲ搆、万事神妙ニ沙汰仕、御大切之御用承リ、奉忠勤候、兵亂之折節殊ニ無比類之由、太上法皇其御叡感之餘リ、勅命ニ而永代山國、與可稱由被仰下候事、○上略

北朝、法勝寺法華入講ヲ停メ、經供養ヲ行フ、

〔師守記〕

○三十八 帝國圖書館本

七月二日、甲子、天晴、申剋許西方雷鳴、○中 今日

頭宮内卿信兼朝臣觸申局務云、法勝寺御入講自來七日可被始行、任例可被催沙汰之由、被仰下云々、禮紙云、僧名定可爲當日、可被存知云々、不及請文、可加下知之旨、被答了、則被下知文殿代助豐、又堂童子廻文同被書遣之、恐相觸可申散狀之由、被下知了、○中略

法勝寺御入講自來七日可被始行、任例可被催沙汰之由、被仰下之狀如件、

七月二日

宮内卿信兼朝臣判

四位大外記殿

追申

僧名定可爲當日、可被存知也、

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月七日

法勝寺御八講自來七日可被始行、任何可被致沙汰、僧名定可爲當日、可被
存知、忿相觸分配一薦外記、急速可令申散狀、兼又堂童子廻文可被遣之、忿
相觸可被申散狀、雖可被召、遲々之間、如此被仰下也、仍執達如件、

七月二日

延兼

外記文殿

堂童子役
ノ人々々

散位藤原朝臣光盛

中務少輔源朝臣仲興

伊豫守源朝臣仲雅

宮内權少輔源朝臣仲持

散位源朝臣長繼

右法勝寺御八講堂童子役、任何可被參勸之狀、依仰所廻如件、

貞治三年七月二日

六日、戊辰、天晴、○下略

南都聽衆
上洛セズ

(前卷)家君出仕、後剋文殿助豐持來法勝寺御八講廻文、散狀申也、留守之間被置
之了、

七日、己巳、天晴、入夜戌剋、天陰雨下、終夜不絕、寅剋以後休、○中今日法勝寺御

八講不被行之、御經供養云々、是南都聽衆申子細、不上洛之故也云々、

北朝、方廣院ヲシテ、祈禱セシム、

〔久能本文書〕

祈禱事、可令致精誠給候也、仍執達如件、

貞治三年七月七日

掃部助

方廣禪院長老

是ヨリ先、法印匡遍、繪旨ヲ掠メ、寶莊嚴院領近江速水河道ノ賦租ヲ冒
占ス、是日、北朝、其繪旨ヲ收メ、同賦租ヲ東寺ノ寺用ニ充テシム、尋テ、東
寺雜掌、更ニ幕府ニ上書シ、速ニ遵行セラレンコトヲ請フ、

〔東寺百合文書〕

○山城 寶莊嚴院評定引付年貞治甲辰三

寶莊嚴院散在寺領等事、貞治元年十月十日、同二年後正月十七日、所被下匡
遍法印繪旨、可被召返之、且彼兩度之繪旨被召返了、可存知由、可下知東寺之

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月七日

九〇三

光濟ナシ
テ繪旨召
返ノ旨ヲ

東寺ニ傳
ヘシム

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月七日

九〇四

間、可令書遣給旨於光濟僧正給之由、被仰下候、恐々謹言、
貞治三
七月七日
日野藤中納言
時光

(萬里小路御房)
藏人辨殿

繪旨

寶莊嚴院散在寺領等事、貞治元年十月十日、同二年後正月十七日、所被下匡
遍法印繪旨、被召返了、可存知之由、可令下知給之旨、天氣所候也、仍上啓如件、

貞治三
七月七日

万里小路
右中辨嗣房

謹々上 東寺長者(光善)正御房

寶莊嚴院散在寺領等事、貞治元年十月十日、同二年後正月十七日、所被下繪
旨、可被返進之由、被仰下候也、仍執達如件、

七月七日

右中辨嗣房

謹上 治部卿(金重)法印御房

〔東寺百合文書〕(繪裏書) ○ヶ一之七
山城

幕府ヘノ
申狀

(繪裏書)
速水河道事

速水河道
壇供餅三
百八十枚

東寺雜掌謹申

欲早被成御書下嚴密被究濟當寺管領寶莊嚴院領近江國(淡井郡)速水河道壇
供餅三百八十枚事

副進

一通 繪旨案 貞治三
七月七
被召返匡遍法印所掠給繪旨事

右寺用者、爲每年々始修正壇供要脚、年内悉令究濟之條、恆例也、重色異于他
之子細先々言上事、舊訖、而去年匡遍法印就掠給繪旨、御沙汰聊令停滯之間、
依致訴訟、被召返匡遍所給繪旨、可全寺家知行之旨、所被成勅裁也、然早任彼
勅裁旨、預急速御遵行、欲全寺用收納矣、仍言上如件、

貞治三年七月 日

○北朝、地下人ノ寶莊嚴院領ヲ違亂スルヲ停メ、東寺ヲシテ之ヲ管領
セシムルコト、貞治元年十月十日ノ條ニ、重ネテ管領ヲ全ウセシムル
コト、同二年閏正月十七日ノ條ニ見ユ、

幕府、小林重長ヲシテ、丹波國分寺地頭職ヲ、佛師院吉ニ交付セシム、

〔雨森善四郎所藏文書〕坤 ○山城

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月七日

九〇五

年始修正
壇供ノ要
脚

佛師院吉申丹波國々分寺地頭職事重御教書如此早任被仰下之旨茲彼所沙汰付雜掌於下地可被執進請取也仍執達如件

貞治三年七月七日

氏冬(山名)花押

小林民部大夫殿

佛師院吉申(母)國々分寺地頭職事

右任被仰下之旨付院吉代於下地候畢仍渡狀如件

貞治參年七月廿二日

章蔭(坂上)花押

八日庚午北朝光嚴天皇ヲ丹波常照寺ノ後山ニ葬リ奉ル光明法皇之二御幸アラセラル

〔迎陽記〕

○武氏德川昭

七月八日晴法皇昇霞御夏今日未刻前權大納言忠季

示送仍家公余馳參殿中秉燭之間右衛門督忠光卷參仕亮闇事有沙汰御

葬禮今朝已過御一向天龍寺當住妙葩和尚執沙汰更非尋常儀奉火葬云々

禁中自今朝下御殿御格子於朝餉者依爲遣戸無內外御膳止之音奏警蹕可

止之由内々職吏下知之内侍所女官不可堂上之由同下知之略

渡狀

長經秀長等參内
妙葩沙汰
ス火葬シ奉
ル

唐様ノ御
龍

卯刻ニ行
ハル

〔師守記〕

○三十九 帝國圖書館本

七月十日壬申天晴今朝自四條中納言昨日返

事來取只今被參伏見殿自路次之旨使令申略中彼使者語云八日太上法皇

御葬云々唐様以龕葬申云々猶可尋記

〔皇年代私記〕

光嚴院

諱量仁在位二年後伏見第

貞治三年七月七日崩御

丹波國山國陵春秋五天下諒闇八日卯刻點近山奉葬之伴僧衆沙汰也今不

及追號沙汰即御稱號光嚴院以此間御庵號被擬追號是依遺勅也

〔太平記〕

三十九 前

法皇御葬禮事

此時ノ新院光明院殿モ山門貫首御法親王梶井宮モトモニ皆禪僧ニ成セ給ヒテ

考太平記ニ皇年代略記云光明帝觀應二年十二伏見殿ニ御座有ケレハ急

月二十八日御落飾詳見于第三十三卷トアリ

キ彼○西源院本遷化ノ山院前田家西源院へ御下リ有テ御茶毘ノ事ト

モ取營マセ給ヒテ後ノ山ニ葬シ奉ル哀仙院芝山ノ晏駕西源院本ナラ

マシカハ百官涙ヲ滴テ葬車ノ御迹ニ從ヒ一人悲ヲ吞テ虞附ノ御祭ヲコ

ソ營マセ給フヘキニ懸ル西源院本懸御事トタニ知人モナキ山中ノ御

葬禮ナレハ只徒ニ西源院本只徒鳥啼テ挽歌ノ響ヲソヘ松咽テ哀慟ノ

聲ヲ助ル計ナリ夢ナルカナ往昔ノ七夕ニハ長生殿ニシテ二星一夜ノ契

塔ヲ怡雲
トイフ

ヲ惜テ、六宮ノ美人、兩階ノ伶倫、臺下ニ曲ヲ奏シテ、乞巧奠ヲコソ備ヘサセ
 ラレシニ、○前田家、西源院本、修悲カナ、當年ノ今日ハ、幽邃ノ地ニシテ、三界
 八苦ノ別ニ逢テ、萬乘ノ先王、一山ノ貫頂、山中ニ棺ヲ荷フテ、○西源院本、修
 ル、御葬送ヲ營マセ給フ、只千秋亭○西源院本、只ノ一字ノ月有待ノ雲ニ隱
 レ、萬年樹ノ花無常ノ風ニ從フカ如シ、サレハ砌ヲ遠山川モ、○前田家本、山
 是ヲ悲シミテ、雨トナリト○前田家本、雨降ルニ作ル、雲トナルカト怪シマル、心ナキ草木
 モ、是ヲ悼テ、葉落花萎メルカト疑ハル、恩ヲ感シ、德ヲ慕フ舊臣多シトイヘ
 トモ、豫敕ヲ遺サレシニ依テ、參リ集ル人モ稀ナリシカハ、纔ニ籠僧三四人
 ノ本、○參考太平記ニ、天正勤ニテ、御中陰ノ菩提ニソ資シ奉リケル、御國忌ノ
 日コトニ、種々ノ御作善積功累德セラル、○前田家、西源院本、御國忌
 略

〔常照寺記錄〕 波丹 開山法皇 諱量仁、○中貞治三年七月七日、集左右書
 遺誠數條、竝遺偈曰、謝有爲報披無相衣、經行坐臥、千佛威儀、
 少焉崩御、算五十二、奉全身、窆于寺後、是日光明帝及諸王子入山會葬、塔曰怡
 雲、

〔丹波山國莊由緒書〕

太上法皇、貞治三年甲辰七月七日、崩御被爲成、乍恐井戸

御葬送ノ
料足

村大雄山常照寺ニ奉葬、其砌自京都堂上方一兩輩御下向有之、則御葬送之
 式被爲在候、乍恐右之料足等モ、山國奉獻之候事、其後御中陰之事共、神妙ニ
 沙汰仕候由申傳候畢、○上略

武家料足

〔愚管記〕

十八 應安七年二月廿一日、丁巳、晴、傳聞、武家料足一昨日万疋致

沙汰之間、廿四日渡御倚慮必定之由、爲沙汰云々、武家料足摠用七万疋、是貞
 治之例云々、貞治諒闇之儀、五万疋、二万疋ハ、天龍寺以下被施入云々、

〔迎陽記〕

武○德川昭 七月十日、晴、早旦、家君御參伏見殿、付三品局被申云云、

院號

人々濟々參任、（任カ下附シ）揭焉云云、自殿中被下御書、有召、不俟駕參任、條々事有沙汰舊
 院々號事、有勅問、御申詞、有御談合、余清書副奉書、遣嗣房許、

院號事、近例於舊院、有其沙汰歟、或御在所、或被尋御素志、被定其號、今度儀不
 存知子細間、短慮無左右難定申、圓融土御門間、可爲何様哉、但土御門者、登極
 地雖似有其寄、當時皇居、尤以可有儀、且以訓不可稱之由、有其說々、（云脱カ）旁不宣哉、
 圓融雖無殊由緒、聖代之徽號、被准用之條、存先規、抑光嚴院爲御幽閑地、然者
 若可叶御素意哉、寺號傍例、醍醐寺、圓融寺、被用畢、不可有巨難哉、繹爲重事、猶
 可被決群議歟、延久夏六月廿六日、七々日佛事日、爲載御願文、被定御號云云、遺詔已

幽閑ノ地
御素意ニ
叶フベシ

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

九一〇

院號案

後、此等子細可被申歟(於力)仙洞哉、此上宜在時議矣、引合折紙書之、
書副別狀其案、

院號事、御申詞一紙被申之候、可令得此意給候、抑明日遣詔奏一定候歟(實尾)、
廣朝臣故障之由、今朝自内裏被申候、凡延久、建久、共以受領仕候、雖然今度、
不可有院司候歟間、就元亨儀、被計申候了、若猶令申子細者、非職雲客不可、
有其難、凡舊院々司叶理歟、然而擬院司其沙汰候條近例候、所詮雖誰人、御
忌可被相觸之由候也、恐惶謹言、

七月十日

(金坊地) 秀長

藏人辨殿

〔諸陵周垣記附細并次郎〕元祿十一戊寅歲諸陵周垣成就記

光嚴 丹波國山國山ノ後ニ葬ル、

右陵場所御書付ニ相違無之候、

已上丹波國之内陵一ヶ所、上略

〔歷代廟陵考〕書宮内省圖 享保年中再興諸陵

光嚴 丹波國山國山之後ニ葬、

元祿十一
年ニ周垣
ヲ修理ス

享保年中
ニ再興ス

玉虫左兵衛
御代官所

碧巖殿ノ
後山

御拾骨ノ
御儀式ナ

宸像ハ碧
巖殿ノ上
段ニ安置
シ奉ル

同桑田郡山國庄井戸村常照寺境内ノ山ニアリ、玉虫左兵衛御代官所、〇
墓一隅抄異事ナシ、

〔山陵考〕書宮内省圖 山國陵

光嚴院天皇の御陵あり、丹波國桑田郡井戸村常照寺なる碧巖殿の後山ニ
あり、未の方ニ向て、高さ五寸、廣さ八尺四寸許ニ、四方をかつら石もて圍ミ、
沙磧を布充て、中より、松、楓、椿、と生出、る所是あり、この御葬送のこ
と、迎陽記ニ、〇中略、崩御ノ條ニ、收ム、カと云えたること、古の常照寺ニ、
しまして、遂ニ御事、ありし乎、を、取、り、ち、其、後、山、ニ、て、火、葬、ニ、お、し、奉、り、御、拾、骨
の御儀式も、あ、く、其、ま、土、を、覆、ひ、て、御、陵、と、お、し、る、もの、ある、こと、常、照、寺
記ニ、云、る、さ、ふ、御、遺、誠、の、略、に、松、柏、自、生、於、塚、上、風、雲、時、往、來、者、爲、予、之、好、賓、甚
所、愛、也、と、云、え、たる、よ、て、い、ち、云、ふ、し、〇常、照、寺、ニ、移、ら、せ、給、ひ、し、由、縁
ハ、太、平、記、ニ、〇中略、と、云、え、る、あ、こ、し、云、え、し、よ、り、こ、の、か、か、し、こ、く、も
朝夕、お、こ、お、ひ、ま、ま、し、て、お、い、し、ま、し、よ、し、迎、陽、記、ニ、云、え、り、さ、終、り、其、寺
にて、開、祖、と、仰、き、ま、つ、り、來、れる、も、ま、こ、と、諾、ある、お、や、ま、て、宸、像、ハ、寺、内、の
東北、の、あ、る、碧、巖、殿、の、奥、に、か、た、の、上、壇、ニ、安、置、し、奉、り、其、前、ある、左、右、の

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

九一一

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

九二二

柱より、謝有爲報、披無相衣、經行坐臥、千佛威儀と記し給ひし御遺偈の聯を
かけ、まゝ其前の柱より懸る聯より、猿抱子歸青嶂、裏鳥啣花落碧嶠前と記
せり、かくの如くおきり、この碧嶠殿の後山より葬り奉るること、はことよゆ
ゑあることあるへく、まゝ御陵のいとことそきたる状あるも、かの御遺誠
を守る給ひしものあるへし、まゝこの御陵の左傍より、同じ状ある塚あり、こ
の光明院天皇の書寫し給ひし經文を埋沱る塚にて、御陵あらざるよし、寺
家の傳説たしある終り、まゝ疑ふ處くもあらはるし、

〔諸陵説〕

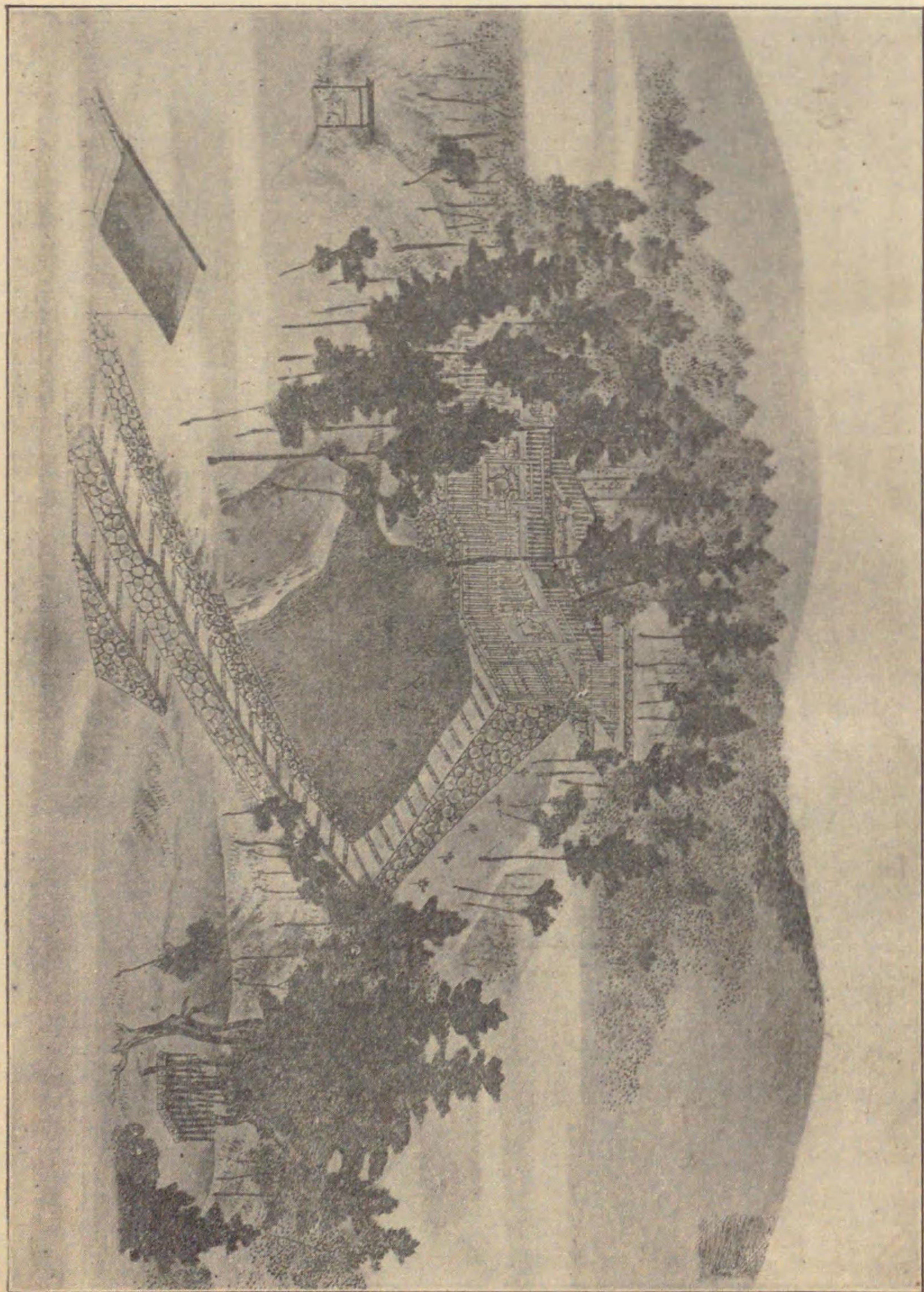
丹波國桑田郡 山國御塔院光嚴

黒川道祐京北云、丹波國桑田郡山國庄大雄山常照禪寺ハ、光嚴院法皇無範
御禪定ノ地ナリ、法皇始メ道覺法師ニ命シ玉ヒ、御禪定ノ地ヲ視シメ玉フ、
斯處叡慮ニ適玉フ、則常照寺ヲ造立アリ、自第一祖ト成玉フ、御剃髮ノ戎師戎師
前南禪清溪通徹、第二世ト成ル、山國ハ九村アリテ、從京都凡十里許ノ行程也、法皇
宸像左右ノ柱一聯アリ、謝有爲報、披無相衣、經行坐臥、千佛威儀、是レ貞治三
年七月七日崩御前ノ御遺偈ナリ、遺勅ニテ陵ヲ不築、松杉三四樹、其傍ニ御
塔アリ、于今毎年七月七日御忌ヲ勤ム、略下

道覺ニ命
御地ヲ
定メテ
給フ
説

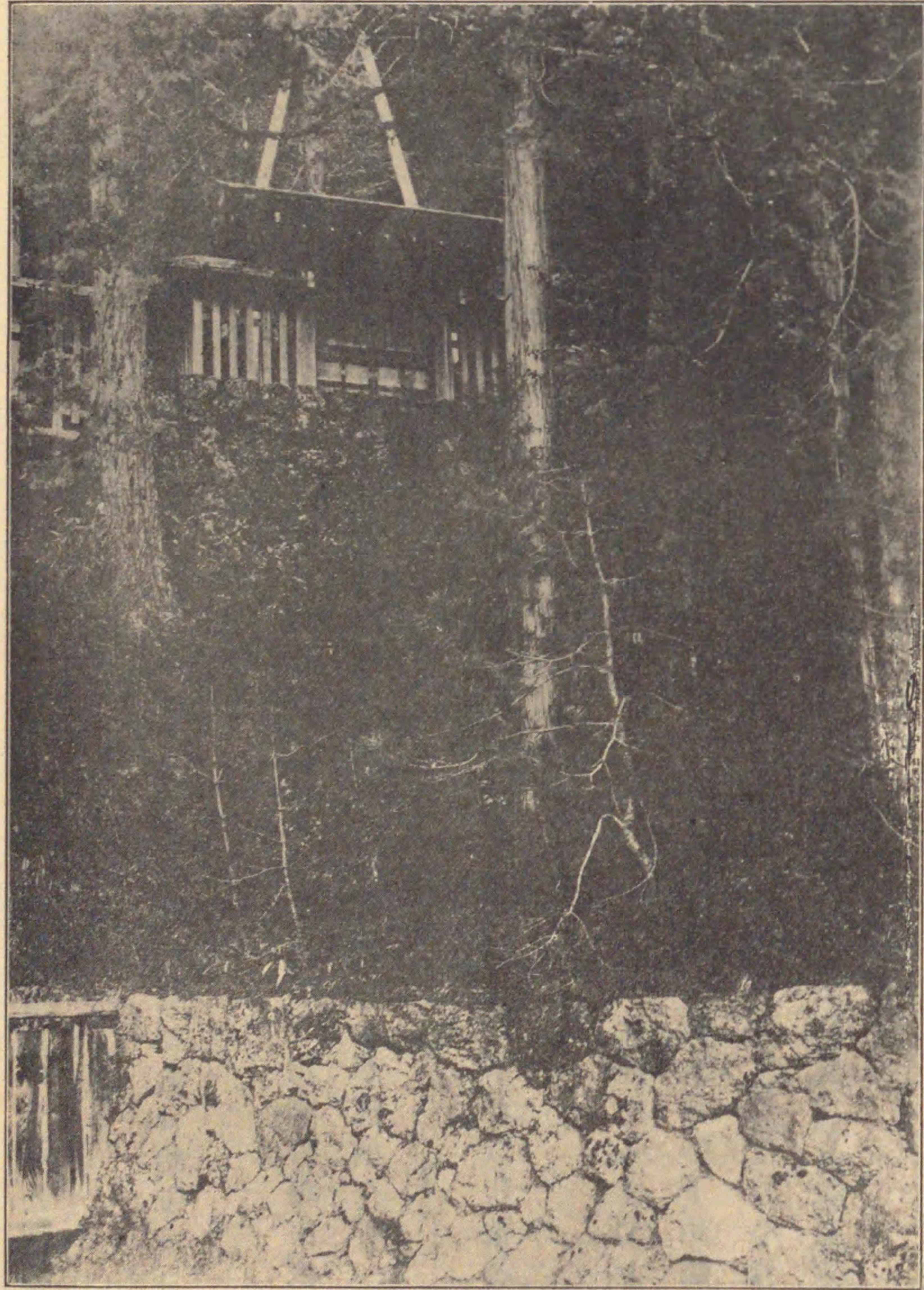
〔光嚴天皇御陵繪圖〕

慶應元年八月修理
宮内省圖書寮所藏



南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

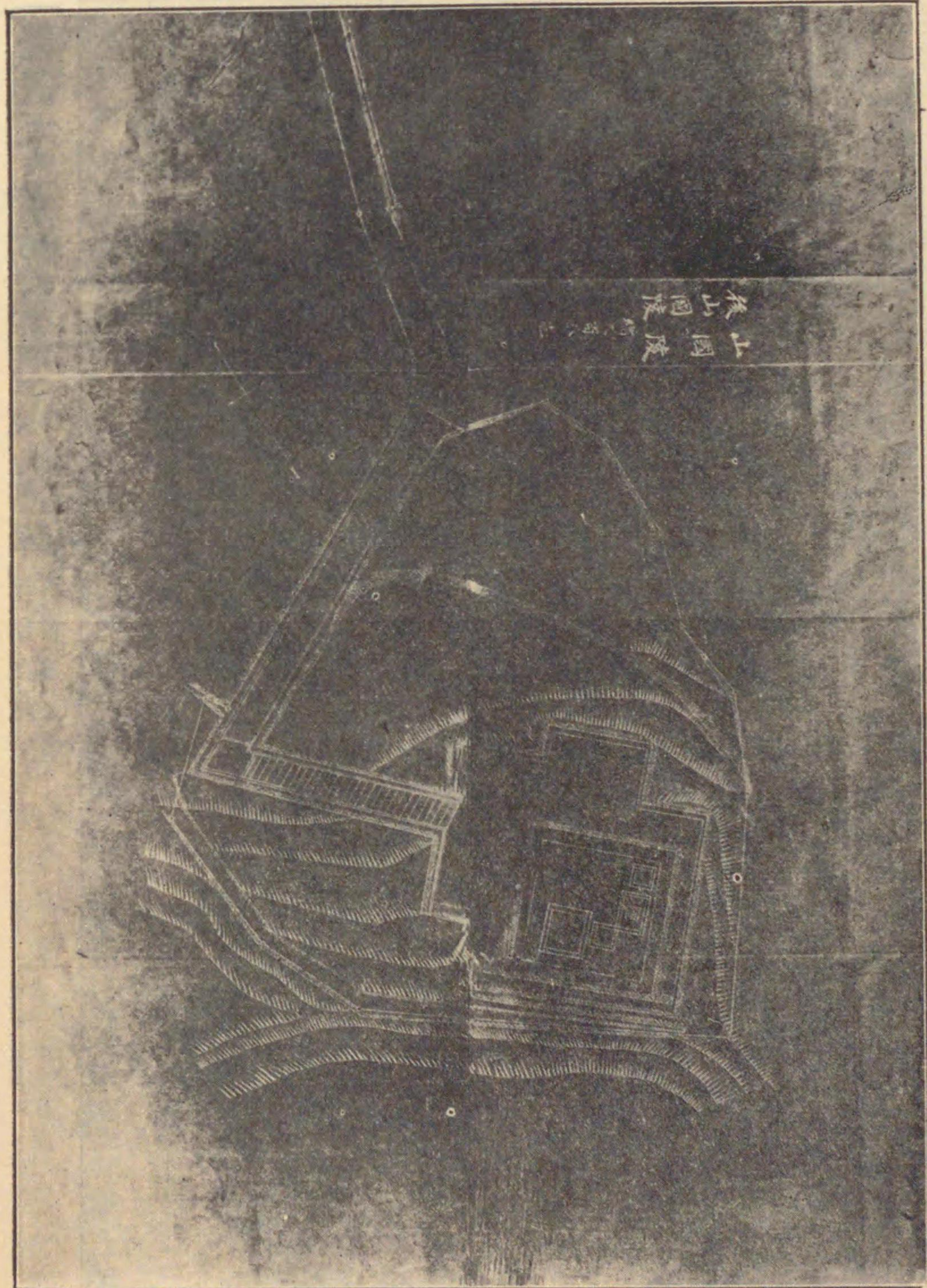
九二三



南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

〔光嚴天皇御陵〕

○昭和二年十二月攝影
寫真原版內省諸陵寮所藏



〔光嚴天皇御陵實測圖〕

○明治四十年實測
內省諸陵寮所藏

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

重日

○十三日ハ、光嚴天皇ノ初七日御忌ニ相當スト雖モ、重日ニ依リ、御誦經定ナキヲ以テ、便宜左ニ合致ス、
〔迎陽記〕○徳川昭武氏本 七月十三日、乙亥晴、今日雖令當舊院初七日給、依重日、無御誦經定、且代々例也、

御中陰佛事殊ナル事ナシ

〔柳原家記録〕二十七敦有卿記 貞治三年七月七日、太上法皇崩于山國御菴室、依爲兼日御素意、御中陰御佛事儀無殊事、只於大光明寺、毎日大悲呪、朝夕各一反、每七日待夜諷經許也、

師茂初七日御誦經寺院ノ光トヲ忠光ニ問フ

〔師守記〕三十九帝國圖書館本 七月十一日、癸酉、天霽、○中略 今日家君以狀被尋問右衛門督忠光卿諫開云、

何條御事候哉、可參申入候之處、不具非一事候之間、先以狀伺申入候、初七日御誦經寺々延久建久不同候歟、次何寺ニ今度可被立候哉、被仰下、相觸使ニ可申入散狀候、且爲御不參、三ヶ度寺々注進折昏候、兼又初七日令當十三日賜候歟、件日重日候、定可被去候歟、然者何日可被立候哉、日次治定候者、内々先可蒙仰候、每事可參入言上候、師茂恐々謹言、

七月十一日

師茂上

人々御中

端書

文永度雖被用延久例候、寺々不同候歟、今度之儀、急速有御伺、被仰下、可相觸候云々、無返事、初七日可有沙汰之由、以詞有返事、
(合カ)

折紙

延久ノ例

延久

初七日

常住寺 仁和寺

廣隆寺 東寺

西寺 圓成寺

圓宗寺

建久

初七日

常住寺 仁和寺

東寺 西寺

建久ノ例

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

延曆寺 法勝寺

蓮花王院

文永

○原本、此間初七日ノ三字無シ

常住寺 仁和寺

東寺 西寺

圓宗寺 蓮花王院

淨金剛院

文永元應(初服力) 御誦經定文寫進之、

十三日、乙亥、天晴、申剋已後雷鳴、南方、

略 上 先日伺申入候初七日御誦經寺々事、忿有御伺可被仰下候、凡不限初

七日、延久建久不同候歟、以何度例可被立候哉、隨被仰下、可相觸使之候歟、

局催不可事行候之間、就散狀可申職事候、每事可參入言上候、師茂恐惶謹

言、

七月十三日

師茂 上

文永ノ例

文永元應ノ例 御誦經定

延久健久ノ例 御誦經定

御讀誦 天下諒闇 以下諒闇 沙汰ノ事

勅問 叡慈御悲 以テノ故 執柄ノ事 沙汰ノ爲

卷綴人

延曆寺 法勝寺

蓮花王院

文永

○原本、此間初七日ノ三字無シ

常住寺 仁和寺

東寺 西寺

圓宗寺 蓮花王院

淨金剛院

文永元應(初服力) 御誦經定文寫進之、

十三日、乙亥、天晴、申剋已後雷鳴、南方、

略 上 先日伺申入候初七日御誦經寺々事、忿有御伺可被仰下候、凡不限初

七日、延久建久不同候歟、以何度例可被立候哉、隨被仰下、可相觸使之候歟、

局催不可事行候之間、就散狀可申職事候、每事可參入言上候、師茂恐惶謹

言、

七月十三日

師茂 上

人々御中 右衛門督忠光卿

今日大博士宗季、延久建久御誦經定文寫進之、

今日故院令當初七日給、而依重日、不被立御誦經使、禁裏御物忌也、御物忌

□□御簾□殿下格子間、不被付之、其外皆被付之云々、不被立物忌札云々、

後光嚴天皇、諒闇ノ諸儀ニ就キテ、二條良基等ニ諮詢シ給フ、

〔迎陽記〕

武(德川)氏(昭) 七月八日、晴、(中)入夜、殿下御參内、(御衣冠)家君、(御直)余

衣冠、卷纏也、垂纏雖有先規、於雲客者卷之條、猶可然之由、見代々記、仍殿下御殿、(自今)朝避計間卷之、御共參、御車御參時、分勸修寺

參仕、一位猶御學問所御對面、(殿此座此所)一品持參法皇御遺誠、天下亮陰以

下更、不可爲沙汰云々、仍背遺詔之條、却可謂不孝歟、何樣可有沙汰哉之由、

被申談殿下、御意見云、於御遺誠者、代々雖如此、依其無停止之儀之上者、今度

又同前之由相存、此上事可在時宜之由被申、天氣又無子細、且以右衛門督勅

問一條、近衛、兩殿御意見一同、仍御定、今度以右衛門督被定傳奏、以藏人右中

辨嗣房、(當時)神宮南曹奉行、爲奉行職事、叡襟以外御悲歎、仍今度儀、每事爲執

柄御沙汰、可申沙汰之由、仰傳奏云々、書云、高宗諒陰三年不言、以聽於冢宰、右

亦如此乎、御心中察申入、更催哀慟者也、寅剋御退出也、今夜卷綴人、藤中納言、

延久建久
ノ例ニ據
ラル

三條實繼
ノ書狀

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

九二〇

時光 右衛門督余等也、在胤朝臣雖參仕、無其儀、但先規不同之上者、非可爲失、
今度諒闇、被申延久建久例也、今度不被立勅使、其故者、御葬禮今朝已令過御
之上、無舊院儀、遼遠之故、
九日、晴殿中當番仍祇候、右衛門督參仕、諒闇事有沙汰、宗季參仕、被召簾中御
對面、諒闇條々有御抄出、余執筆、終日御沙汰、晚頭退、舊院御遺誠於御前寫取
之、

〔進獻記錄抄纂〕

後四十三
愚昧記

貞治三年七月七日光嚴院御諒闇記 略 中

昨日申承候、恐悅候き、公豐進退事、賢慮之趣、愚察所存無相違候、而兩執柄
申詞無子細候上者、あし時宜候、令赴候いねと、推量之間、恐痛存候、廣可
被經御沙汰之由申入、もしくは准據例も、又何ある道理篇出來候事もや
と存候き、而其段之候いんおれ、ある様候間、此分よてい猶豫同前候、
素服事、又重被仰下候旨、子細同前事よて候、就候猶々勘見候之處、貞應家
記見出候、不重篇目一紙注獻候、御了見之分、被勘下候者、恐悅候、凡如此凶
事無爲無事之時、不及沙汰候、無口傳故實候之間、彌迷是非候、さてと除服
近々罷成候、父祖之時者、向河原候き、近日難治至極、陰陽師又々子細候、以

前常事候上、先々日付あとい、御沙汰 雖門前如乘車候乎、只今改
出候條、聊爾候哉、庭上あとして除服事、もし被存候如何、以次言上之條々、
可勘奉候、恐惶謹言、

七月十日

實繼

追而書

昨日申入候し大臣殿事也、教業事候也、若すちあき事を承候哉、まさ
しくさる説うと覺候、

不審兩條

一未著陣凶事奉行准據例事、

貞應二年五月十四日、後高倉院崩御、同廿一日中宮御著服時、權大夫公
氏卿參内、勘日時、同八月十八日御除服之時、同前同十九日本官請印權
大夫參内、先著陣兼官之後、辨官不參之間、著陣遲引云々、
今案、雖爲著陣以前、凶事奉行可被准據哉、但彼者不著仗座、於本官勘
申歟、猶可有差異哉、

已上家
記所見

一同人賜素服事、

此條又無先例云々、但案事儀、賜素服之時、著陣之條、雖爲規式、依未著陣

同素服ヲ
賜ハル事

未著陣ノ
行人内事奉
ノ准據例

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

九二一

不著之、自殿上、直向陣外著之、於便所除之、有何妨哉、除服之時、同前、如節會未著陣人、直參上儀、可同准歟、雖為新儀、不可乖違由存候、可為何樣哉、中納言殿御出仕有無不審之間、只今自是欲尋申候つ、借通御札本望候、於愚定者、兩執柄所存分許、其理猶不舉、捧、只以凡儀被始、邂逅例之條、非無猶豫候哉、但只今奉候、貞應蹤跡分明之上者、可被推據候歟、彼御兼官、是御一級同事候哉、本官仗座其所雖相替、所詮未著陣而凶事御奉行、不可相違候哉、可有御奉行候、可被申此例候哉、次著素服之後著陣、先規雖勿論、差而無其上者、節會未著陣之人、直以參上儀、被資准の之條、強不可背理候哉、と存候、先々御一廻無程候、

追書 御心中察申候、除服之時、或門外、或庭上、其例等連綿候、愚身著除共門外、不及乘車候乎、恐々謹言、

重喪之人、令復任之條、已為流例、帶官職之上者、除宴會之外、可朝參之條、勿論歟、就中重服裝束色目、已見記錄等、著彼服可出仕哉、令條凶服而不入公門之由、雖載之、古來所用重服裝束、非讓府、不可有其憚歟、但諒闇中重服人出仕、先規未勘得之、仍著黑染歟、用諒闇服歟、兩樣之間、所見不分明矣、爰建

重喪ノ人ノ復任ハ流例

久諒闇之時、野宮左大臣（公稱）參謀、遭父喪、其後天下諒闇也、而重喪一期了、著諒闇服出仕之由、見或記、

彼心事尙々無申限候、夫者得者可達狀候、者素服之事等多候、是も其分、てもやらんと存候間、於愚定候、無分明記錄者、猶不審ある様候、如何御了見候らん、如此事、誠以次勘決之事、兼又中納言殿、卷纓、可然存候、垂卷兩儀、人々所為不同、勿論候事候、省略候、恐々謹言、以下

四條三位隆鄉卿問題也、貞治三七廿六、

不審條々

一 父母服中遭諒闇時服制事、

官人遭父母喪之時、解官之上者、舉哀而不可出仕之條、勿論、然而不得已、有可出仕事者、服色可為何樣哉、禮記云、曾子問曰、父母之喪、既引及塗、聞君薨如之何、孔子曰、遂、既封、改服而往、注曰、封亦當為定、改服括髮徒、既布

父母ノ喪ノ諒闇ニ遭ヘル時ノ服制

心喪服
諒闇服

深衣扱上衽不以私喪包重尊云々如此文者改父母喪服可著亮陰服歟云先規云其法委可注預

一心喪服與諒闇服同物歟束帶直衣布衣等委可被注下矣

心喪服 冠 袍 大口 帶 鞞 沓 扇 如笏以上 劔 渡懸 下重 淺黃或青 朽葉平絹

半臂 同上 表袍 裏紅 單白 帷 同上 直衣 平絹云々

素服裝束
色制

一素服裝束色制以下同具可被注下事

冠 卷纒 袍 平絹 下重 鼠色無 半臂 同上 單 鈍色 表袴 平絹鼠色 或鈍色裏

色 柑子 袖 或鈍色 大口 柑子 扇 或鈍色 沓 鈍色 鞞 如笏 笏 劔 不帶 例

也 帶 烏犀 直衣 生絹 指貫 練或單 帷 白 袖同之 下袴 練白

扇 花田紙 沓 鈍色 帶 鈍色 狩衣 平絹鼠色冬練夏生共 衣 鈍色或 無薄紙 數 狹 長短有兩說 白帷同

單 同上 指貫 見右

一本朝諒闇并素服元始時代事

諒闇之起國史不所持之間不及引勘之但光孝天皇以前者一莽之間百官諸國一同著素服延長以後依遺詔停一天素服之儀公卿錄事所司著

諒闇
素服
起原

師茂ヲ召
サル

〔師守記〕

○三十八 帝國圖書館本

七月八日庚午天晴○中 今日午剋右衛門督忠

光卿納言進狀於局務就天下諒闇事有可被仰下事只今間可令參仕云々不及請文可參由被答了同事被仰官務彼卿諒闇傳奏也

同剋大宰權帥仲房卿尋申云延久以來凶事奉行職事不審事付廻注賜哉了云々只今依召參內候可參申之旨被答了

未剋自殿下有假名御書法皇御事治定諒闇儀有用意只今程可有御參元亨四年素服公卿以下人數可被注進云々則可參仕之由以詞被申了

未剋家君著束帶垂纒參內給依召也勘例等未被用意先被馳參者也家君於記錄所以忠光卿御問答諒闇間事大夫史量實同祇候垂纒權帥仲房直衣上

元亨四年
ノ例ヲ注
進セシム

師茂參内

素服之由有所見其以後諒闇之服制停止美服之儀歟

○上文 疎略許此節向後不可煩心底候就如此公事謀問之習一向永可

用其說なと候故哉懇懃候間投一行條多其後候於身如然雖非々憑思

食候若又可爲其儀者爲後證別而可承候哉宜在候候（節カ）自然便宜事

相尋候常事候其外者又可存其旨候更非所望候者候一紙注進候嘉應

之度（節カ）如此事忘無正躰候家記委細如何比興々々

延久建久
兩度中陰
勅ノ儀ヲ引

右衛門督忠光卿直衣、上絛、卷衣、上絛中納言時光卿直衣、上絛、卷衣、上絛參內藏人右中辨嗣房衣冠、上絛諒闇奉行職家君西剋歸宅給、今度延久建久例可被用之、兩度中陰之間儀被引勘之、終夜加清書了、中今朝貞應諒闇文書被尋掃部頭之處、紛失之由返答、

今朝彈正延兼被遣文殿許、元應正中諒闇廻文等、撰進之由被仰之、朽損無其形之由申返事、略中

諒闇間事條々、相構可注給候、自是可進給候、

喜承了、此間久不言上仕候、貴邊何條御事御坐候哉、抑法皇御方御惱事、殊驚存候、昨日丑剋御崩御之由、今日巳剋御使、告來候、言語不及候、不能是非、恐々謹言、忠光

尤可參申上候之處、師守此間痾病所勞候之間、一昨日記錄所御沙汰、不參仕候、仍捧愚狀候、恐存候、以便宜加御詞、內々御披露候者、畏存候、又仙洞御參之次、同驚申上之趣、得御意候者、畏入候、且其後何様御候哉、無御心本存候、蒙仰候者、畏存候、每事可參入言上候、師守誠恐謹言、

七月八日

師守上

人々御中

忠光書狀

(表書)就天下諒闇事有可被仰下事、只今間可被參仕之狀如件、

七月八日 午剋

右衛門督忠光

四位大外記殿

使者令持之間寫留之、

就天下諒闇有可被仰下事、只今間可被參仕給之狀如件、

七月八日 午剋

忠光

四位大史殿

仲房書狀

延久以來凶事奉行職事不審事候、付廻注給候哉、謹言、

七月八日

仲房

表書四位大外記殿

師基ノ書狀

殿下仰

法皇此御事すて、治定よて候、まやういんのきとも御用意候て、きと、

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

と、ぞ、いまの程に御まいり候へく候、一向この御所の御はよみて候へ
きよし、御さゝ候程に、かやうにおほせられ候、まき元亨四年の素服の公
卿以下の人数、きとまねしてまいらされ候へく候、もしろふくひし、元
亨よの候のぬやらん、引勘て申され候へく候よし、おほせ事候、

九日、辛未、天晴、今朝延久建久諒闇御中陰間被行雜事例、被注進、被付傳奏右
衛門督忠光卿、慥賜之由、以詞返答之、同例被注進殿下、

今日予爲驚申入近信等、可參向之處、不具之上、荒痢所勞有之間不叶、尤爲且
以狀申遣右衛門督并四條中納言等了、

今日四條中納言送狀云、昨日愚報、物忿時分之間、不及委細候き、此御事尚々
無申計候、代々諒闇被行例、委可注給云々、答云、昨日委細蒙仰候、殊畏存候、法
皇御事驚存候、則可參申上之處、如昨日言上候、痢病所勞相侵候之間、平臥之
躰候、且其子細今朝言上仕了、未拜御報之程候、抑代々諒闇被行例事、昨日爲
勅問、延久建久例被尋下師茂朝臣候、被片文直可被尋仰候歟、今度可被守延
久建久例云々、折節所勞歎存候之趣也、

被申殿下、

師守延久ノ例
注進ス

隆家諒闇
中陰ノ間
ニ行フベ
キ諸事ヲ
師茂ニ問
フ

師茂ノ注
進ノ狀

忠光宛書
狀

延久建久
ノ例
後三條天
皇崩御ノ
時ノ例

昨日師茂參仕之とき被尋下候延久建久諒闇御中陰間、被行雜事例一卷、
えるし申上候、うちく御ひろ候へく候、文永入御倚廬儀、追可注進仕候、
かつくこのよし御心え候へく候、あかかしこ、

御局へ

延久建久諒闇御中陰間、被行雜事例一卷、謹注進候、可有洩御奏聞候哉、師
茂恐惶謹言、

七月九日

師茂 上

人々御中 右衛門督忠光卿

押紙云、
延久建久諒闇中陰間事

延久建久諒闇御中陰間被行雜事例

延久五年五月七日、太上法皇後三條院崩給、

今日權中納言藤原經季卿參入、行警固々關事、又上卿仰外記云、迄太上法

皇御葬日、諸司可廢務者、可停音奏之由、被宣下、令垂晝御座、

亥剋主上遷御舍西北角間云々、

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

九日垂御簾之後不供晝御膳自今日不供膳

十日今夜取藏基彈基等局

十一日權中納言源隆俊卿參入被定太上法皇初七日七箇寺御誦經使住常

寺仁成寺廣隆寺東寺依寬德二年例所被定也但除天安寺被入圓宗寺召

陰陽師有行於所被召御誦誦并倚廬方角勘文歟又召辨被下御葬料宣旨

十三日上皇初七日也寬德例內裏雖非物忌外宿人不參御前今日如此又

公家可被行御諷誦而有行申辰日可被忌之由仍所不被修也云々第二七

日當廿一日彼日重日也仍廿二日子日被始行後々七日不可擇日是寬德

例也云々

十五日御葬新國々遁避不辨濟可加火急責之由有沙汰今日出納成諒關

雜物等牒訖取藏人判次取兩貫首判也

十七日權中納言隆俊卿參入被奏太上天皇遺詔事素服舉哀山陵荷前等

可停止又一基內(葬力)可停宴飲作樂著美服事云々亥剋天皇后御倚廬有御著

服事公卿殿上人等給素服云々依寬德例公卿五人侍臣十六人女房八人

今日戌剋太上法皇御葬送

廿日還御本殿之柝物諸國遁避不辨濟之所々可譴責火急之由有沙汰

廿一日於左衛門陣外奉為太上天皇被立七ヶ寺御誦經(使殿力)隆寺東寺西寺廣

宗寺圓成寺布施物每寺商布十段名香一裹先上卿著仗座被催行件事次被定

申御齋會行事次被勘可始行事所日時初七日二七日御誦經依日次不宜

延引今日臨時所被立也自今日主上於倚廬手令書法花經給本前日左大

臣所召道風本也

是日主上於倚廬內有御齋會事只一度供御膳

今日於院殿上關白殿下以下被定五七日法事雜事

廿四日權中納言隆俊卿著仗座被定三七日七ヶ寺御誦經使(使殿力)極樂寺珍光寺

德寺圓宗寺慈林寺布施物被下宣旨次被定御齋會僧名百七

今日被始御齋會行事所一本御辨以下參入被始行雜事

廿七日被定申三七日七ヶ寺御誦經使極樂寺珍光寺清光寺禪林并布施

物等同前行事上卿不參次權中納言藤經季卿參入被行解陣開關等事

廿九日戌剋主上除御錫紵自倚廬還御本殿先召宮主有御解除事公卿并

殿上侍臣同除素服件素服內藏寮官人宮主等隨身行向東河被棄了

主上御服衣同前

六月一日、午後權中納言隆俊卿參著仗座、召外記被仰下云、今月十日御躰御下、十一日月次神今食等祭、可停止之由、宜召仰所司者、

二日、權中納言隆俊卿參著仗座、被定申四七日七夕寺御誦經使、八坂寺、雲寺、禪林寺、大覺寺、圓覺寺、圓宗寺、宰相各有故障不參、仍右少辨匡房朝臣書定文、次被定御齋會請僧闕請、

五日、師平字無骨參殿下、進覽政初日時勘文、

八日、今日始有政、晴儀徹椅子、獨床子等、設平敷座、

十日、被立四七日七夕寺御誦經使、八坂寺、雲林院、淨土寺、禪林寺、大覺寺、圓覺寺、但禪林、圓宗兩寺使各二人、五夕寺

各一布施物同前、須去五日被立伴使歟、而依御衰日延及今日、今日權中納言隆俊卿參著仗座、先被定來廿二日御齋會請僧、次被定五七日御誦經使、

延曆寺、西塔院、積善寺、上出、雲寺、棲霞寺、禪林寺、圓宗寺、次詔書覆奏、

今日御躰御下停止、

十一日、月次神今食祭停止、依上皇御穢未滿也、

十二日、被立五七日御誦經使、布施物同前、外記史等、於左衛門陣外行事、

十三日、權中納言隆俊卿著仗座、被定六七日御誦經使、東大寺、興福寺、大安寺、藥師寺、法隆寺、禪林寺、次有度緣請印事、次結政請印如常、先例七大寺共被立、而今度除元

興、西大寺、被定禪林、圓宗寺等、是依時儀也、

十四日、權中納言藤原祐家卿參入、被行內印、

十九日、被立六七日御誦經使、布施物同前、

廿日、今日御齋會行事、上卿以下被參圓宗寺、始行堂莊嚴等事、

廿二日、今日於圓宗寺、被修故院七々日御齋會、

廿四日、權中納言隆俊卿參仗座、被定七々日御誦經使、真觀寺、醍醐寺、禪林寺、法隆寺、圓教寺、法

成寺、圓宗寺、

廿六日、今日被立七々日御誦經使、布施物同前、又於本院被修七々日法會、

仍公卿殿上侍臣等多以參入云々、

建久三年三月十三日、太上法皇後白河院、崩給、

今日關白并左大臣以下參入、被定申可有亮陰否事、

入夜權中納言藤原兼光卿、被奏故院遺詔事、前備後守仲經朝臣爲使、則被仰警固事、固關使被付國司、

後白河天皇崩御ノ時ノ例

十五日、法皇御葬送也、以平生之儀、奉渡蓮花王院法花堂、

十九日、大納言實宗卿參入、被定申故院初七日御誦經事、次被立使、常住寺、仁和寺、

東寺、西寺、延曆寺、法勝寺、蓮華王院、

今日、天皇御倚廬著御錫鈿、公卿以下給素服、公卿五人、殿上人十六人內、藏

頭二人、五位藏三人、藏人四人、非藏人二人、出納二人、御厨所預一人、女房典侍以下八人也、

廿六日、大納言實宗卿參入、被立二七日御誦經使、真觀寺、元慶寺、安祥寺、蓮華觀

院、先被定二七日、三七日兩度使等、

四月一日、無平座、依故院御事也、

二日、大納言實宗參入、被定申中陰御齋會日時、并行□□等、即行事所始也、

戊時、天皇自土殿遷御本殿、

權中納言兼光卿參入、被行解陣開關事、又召外記、被仰今月諸社祭可停止

之由、

四日、被立三七日御誦經使、極樂寺、珍皇寺、清水寺、圓融寺、圓宗寺、法勝寺、蓮華王院、

八日、實宗卿參入、被定申四七日、五七日等御誦經使、次被定中陰御齋會僧

名、

十一日、被立四七日御誦經使、慈德寺、雲林院、禪林寺、八坂寺、淨土寺、法勝寺、蓮華王院、

十九日、被立五七日御誦經使、圓城寺、西塔院、積善寺、栖霞寺、嘉祥寺、法勝寺、蓮華王院、昨日雖當五七日、

依爲御衰日、今日被立之、

今日權中納言隆房卿著廳、被行平敷政事、有申文并陣吉書、

廿日、加茂祭停止、依諒闇也、

廿三日、後白河院御法事也、去十八日當五七日、而依當主上御衰日延引、自

公家有度者御誦經使、

廿五日、於蓮華王院被行中陰御齋會、實宗卿參入、被定六七日御誦經事、即

被立六七日御誦經使、東大寺、興福寺、大安寺、藥師院、次被定申御齋會闕請、其

後實宗卿以下參向蓮華王院行事、興福寺別當覺憲爲講師、法印良宴爲讀

師、前僧正公顯爲呪願、右少將源雅行朝臣爲御讀經使、高通朝臣仰度者、先

是參議光雅卿著結政行度緣請印事、

五月二日、奉爲後白河院、被免囚人四十六人、

今日權中納言兼光卿參入、被立七々日御誦經使、醍醐寺、法成寺、法住寺、法勝寺、寂勝寺、蓮華

院、王於舊院殿、被行法會、六十口僧、法印澄憲爲導師、法印雅緣爲讀師、良宴

爲呪願云々、
右注進如件、

七月九日

大外記中原師茂

匡遠宿禰注進之、後日家君、借奉行職事藏人右中辨嗣房、被寫之、

諒闇時被行例

延久五年五月七日、後三條院崩御、

同日、被仰警固并三關警固、可付國司之由被宣下、又迄太上皇御葬日、諸司

可廢務云々、

同十一日、被定七日七ヶ寺御誦經使、又被下御葬祈宣旨、米二百石、絹二百

調布二千段、

同十七日、被奏太上皇遺詔山陵荷前素服舉哀可停止、兼又一井之内、可停

止宴飲作樂、著美服之由被仰之、

同日、下御倚廬、有御服事、

同廿一日、被立初七日、二七日御誦經使、常住寺、仁和寺、廣隆寺、東

寺、西寺、圓城寺、圓宗寺、
初七二七日日次不宜、仍臨時所被立也、

諒闇中陰
中二行ハ
ル、諸事
延久ノ例

同日、被定御齋會日時、六月廿二日、甲午、時未二點、

同廿四日、被定三七日御誦經使、

同廿七日、被立三七日七ヶ寺御誦經使、極樂寺、珍皇寺、清水寺、禪林

寺、圓融寺、慈德寺、圓宗寺、
同日、有解陣開關事、

同廿九日、除御錫紵、還御本殿、

六月二日、被定四七日御誦經使、

同八日、被行平敷政始、

同十日、被立四七日七ヶ寺御誦經使、八坂寺、雲林院、淨土寺、禪林

寺、大覺寺、圓覺寺、圓宗寺、
件使去五日、可被立也、依御衰日延引、

同日、被定五七日御誦經使、次被補御齋會請僧闕請、

同十二日、被立五七日御誦經使、延曆寺、西塔院、積善寺、上出

雲寺、栖霞寺、禪林寺、圓宗寺、
同十三日、被定六七日御誦經使、

同十九日、被立同御誦經使、東大寺、興福寺、大安寺、藥師

寺、法隆寺、禪林寺、圓宗寺、
同廿二日、於圓宗寺、被修七ヶ御齋會、

同廿四日、被定七ヶ日御誦經使、

同廿六日、被立同御誦經使、真觀寺、醍醐寺、圓宗寺、禪林寺、圓教寺、法成寺

八月一日、撤平座初有政、

建久三月十三日、三年脱之後白河院崩御、

同日、被奏遺詔、

同日、宣旨云、

三關警固任例仰國司停止舉哀素服、宴飲作樂、著美服、

同十九日、被立初七日御誦經使、先右

常住寺 仁和寺 東寺 西寺 延曆寺 法城寺 蓮花王院

同日、入夜渡御倚廬、被用東對舍

同廿六日、被立二七日御誦經使、先右

真觀寺 元慶寺 安祥寺 勸修寺 法琳院 法勝寺 蓮花王院

四月二日、被定七々御齋會日時、

同日、開關解陣等事、

同日、還御本殿、

同四日、被立三七日御誦經使、定去月廿六日

極樂寺 珍皇寺 清水寺 圓融寺 圓宗寺 法勝寺 蓮花王院

同八日、被定四五兩七日御誦經使并御齋會僧名等、

同十一日、被立四七日御誦經使、慈德寺、雲林院、禪林寺、八坂寺、淨土寺、法勝院、蓮花王院

同十九日、被立五七日御誦經使、園城寺、西塔院、積善寺、栖霞寺、嘉祥寺、法勝院、蓮花王院

同日、被行平敷政始、

同廿五日、於蓮花王院、被修七々御齋會、先於陣有關請定

同日、被立六七日御誦經使、先右

東大寺 興福寺 大安寺 藥師寺 法隆寺 法勝寺 蓮花王院

五月二日、被立七々日御誦經使、

醍醐寺 法勝寺 法成寺 法性寺 尊勝寺 寂勝寺 蓮花王院

同日、七々御法事也、有免者事、

同七日、內豎音奏事、被仰外記、

同廿日、撤平敷被行政始、

貞治三年七月八日

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

九四二

可令相勞給候、千万省略候也、謹言、

四條中納言
隆家

七月九日

服假人也、

天下亮陰事、驚歎之外無他候、且先日示給之趣、則達叡聞候、謹言、

右衛門督
忠光

七月十二日

權中納言、諒闇傳奏也、

(頭卷)今日四條中納言隆家卿被尋家君云、光嚴院殿御事、万人之悲歎、殊驚歎入候、諒闇中事以下定御注進候歟、然者片案可寫賜候云々、已及昏黑之間、明日可注進由被答了、

今日助豐參入、法皇御事驚申之、又諒闇廻文等、雖引見候、無所見之由被申之、

諒闇廻文

〔師守記〕

三十九

帝國圖書館本

七月十日、壬申、天晴、今朝自四條中納言昨日返

事來取、只今被參伏見殿、自路次之旨、使者令申、去夕被尋申家君、諒闇御中陰間、被行雜事例注進片文、被寫遣了、中略今日法皇寺長老來入、內奏狀等、清書

內奏狀

日次

七々日御
物忌ハ流
例

師茂諒闇
奉行職事
一通ヲ嗣
房ニ注進
ス

師茂ノ書
狀

進之、而闇是非沙汰間、不請取云々、中略今日藏人右中辨嗣房尋申云、其後何條御事候哉、此御事尙々非言詞所爲候、亮陰事申沙汰、邂逅重事、粉骨無術候、中略兼又延久、建久諒闇儀、條々注賜候哉、日次等事、每度寮頭申沙汰、所見不詳候、今度被尋清國朝臣、御不審候間、私尋申候也云々、端書、七々日御物忌流例勿論歟云々、被答云、悅奉候了、法皇御事殊驚存候外無他候、亮陰事申沙汰候、御計會奉察候、中略中文永、元應、元亨諒闇事、清家申沙汰故候、以往又不及貽案候、可被尋問宗季候、兼又延久、建久諒闇御中陰、被行雜事、先日注進片文寫進候、日次事少々引見之處、大略非寮頭候歟、但天曆八年五月八日、皇太后穩子、同月十六日、中納言源庶明卿召外記、仰云、陰陽寮官人御膳日可撰申者、召仰頭以下之由、聊所見候云々、端書、諒闇奉行職事一通注進候、先日所持折紙少々僻事候歟、以便宜可返給候、

是日家君被遣狀於大儒云、

何條御事候哉、先日參會悅入候、法皇御事驚存候、定御同心候歟、抑諒闇御誦經使定文、并中陰御齋會定文日時等、可渡賜候、文永、元應、元亨御誦經使、每度不立寺門候歟、不參之輩定候歟、眞實參向仁不審候、注賜候者悅入候、

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

九四三

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

每事期參會候、恐々謹言、

七月十日

師茂

五條宗季ノ返狀

五條殿返事云、

御札恐悅候、誠先日參會本望候、一日必可參申候、法皇御事驚存候、兼又諒
闇御誦經使定文日時、并中陰御齋會定文等承了、撰見可注進候、又文永、元
應、元亨御誦經使、每度不參寺門歟事、同承了、所見候者可注進候、每事期參
會之時候、恐々謹言、

七月十日

宗季

端書

折節客人對面事候之間、きと用一紙畏入候云々、

諒闇奉行職事

延久五年五月七日後三條院御事

奉行職事藏人頭右兵衛督藤原公房朝臣

嘉承二年七月十九日堀川院御事

奉行職事藏人右中辨藤原顯隆

諒闇奉行職事ノ例

隆家代々諒闇注進ノ例ヲ師茂ニ問フ

貞應三年五月十四日後高倉院御事

奉行職事藏人宮内少輔藤原信盛

天福元年九月十八日藻壁門院御事

奉行職事藏人宮内權大輔藤原兼高

文永九年二月十七日後嵯峨院御事

奉行職事藏人頭皇后亮藤原賴親朝臣

元應元年十一月十五日談天門院御事

奉行職事藏人頭中宮亮藤原成隆朝臣

代々諒闇年々同可注賜候、

光嚴院殿御事、万人之悲歎候歟、殊迷惑無他候、代々諒闇被行例、定令注進
給候歟、片案寫給哉、相構可被付廻候也、謹言、

七月九日

隆家

四薦大外記殿

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

師茂ノ返

延久建久
并仁建久
以後代々
進ノ例ヲ注

師茂可參伏見殿候、且驚申入之由、御披露候者、可畏存候、
光嚴院殿御事、殊驚存候、則欲馳參候之處、依召昨日祇候內裏之上、御參內
歟之由承候之間、不參上候、恐恨候、諒闇御中陰之間、被行雜事、延久建久被
尋下候之間、注進給、文書進候、兼又諒闇年々仁和以後、同注進候、師茂恐々
謹言、

七月十日

師茂

十一日、癸酉、天霽、○中是日自近衛前殿下、爲信兼朝臣奉行、被尋仰局務云、諒
闇年々自古可被注進云々、仁和以後被注進了、
今日四條中納言隆家卿進狀於局務云、

隆家ノ書
服假ノ人
ノ裝束

昨日參伏見殿被申趣、且申入了、諒闇御中陰間被行等注賜了、爲悅候、服假
人諒闇中出仕輩不審候、以便宜注賜候哉、且件人裝束（んじ）こと所見候者、同
可注賜候、○中謹言、

隆家

師茂ノ返

返事注左、

昨日御參伏見殿之由承悅仕候、師茂參事、且御披露、殊畏存候、服假人諒闇

正中度ノ
例文

信兼延久
度ニ於ケ
ル諸神祭
以下ノ沙
汰ヲ師茂
ニ問フ

中出仕例、保元參議朝隆卿右大母服、永萬六位史廣房父服出仕候、由但裝
束事、無所見候、恐恨候、以諸記可被決候哉、○中每事可參入言上候、師茂恐
惶謹言、

七月十一日

師茂狀

（前書）今朝家君以善覺、被示合大儒宗季、諒闇間條々注折紙、被持之又正中度例
文、可渡賜云々、引見所見分、可注進候、例文可撰進處、今度延久建久例被用
之歟、然而延久曩祖肥州御奉行也、建久師直奉行也、如何云々、此返事之樣、
大樣□例文□□就奉行渡之、□不限諒闇說處如此、尤可被案内歟、

十六日、戊寅、天晴、○中今朝頭卿信兼朝臣尋申云、諒闇事、今度延久例候歟、件
度諸神祭以下事、何樣沙汰候哉、不審候、委細注賜候哉云々、明日可申御返事、
可賜取之由被答了、

十七日、己卯、天晴、申剋北方雷鳴、○中

其後不得參會便宜、積鬱候、一日預御尋候者、悅入候、抑諒闇事、今度延久例
候歟、件度諸社祭以下事沙汰候哉、不審候、委細注賜候哉、每事期參會候、恐
々謹言、

信兼書狀

七月十六日

信兼

師茂返狀

(頭書)頭卿昨日返事來取之間、被遣了、注裏、
(裏書)恐鬱之處、悅奉了、以便宜可參申承候也、
抑諒闇事、今度被用延久建久例候、延久五年五月七日、太上法皇崩御、六月十日、御躰御下奏、十一日、月次神今食停止、建久三年三月十二日、後白河院崩給、四月一日、平座停止、同月廿日、賀茂祭停止、中院以後被行候也、昨日罷出事候之間、不申恐報恐存候、每事可參啓候、恐惶謹言、

七月十七日

師茂

勅問

〔師守記〕

○三十九 帝國圖書館本

七月廿一日、癸未、天晴、○中今日諒闇御中陰間

被行雜事例勅問、片文被注進、(經通)一條殿下、又同例被注進、久我右府、(具通)內々以愛宕

中將長具朝臣被進之、○下

義詮、大友氏繼二、豐後、筑後兩國ノ守護職及ビ所領ヲ安堵セシム、

〔大友文書〕

○四 筑後

豐後、筑後兩國守護職并處々所領等事、任氏時之讓補、侍領不可有相違之狀如件、

貞治三年七月八日

(義詮)花押

大友孫三郎殿

〔大友文書〕

○四 筑後

注進

(大友)氏時當知行散在所領所職等事

相模國大友郷付延清

同國三浦長坂郷

上野國利根庄號土井

美濃國中村庄

伊勢國塔世御厨北方

越後國紙屋庄

豐後國守護職

同在國司職

同檢非違所惣追捕使職

同稅所職

同國直入郷付田野

同國緒方庄

同國在隈郷

同國笠和郷

同國山香郷司職同名田一

同國佐賀關付白杵內關宮

同國丹生庄

同國下郡號田郷

同國草地庄

同國鶴見村

大友氏時
知行所
領職目
錄

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

同國朝見郷寶滿寺

同國田原別府半分付岡次松半分

同國都甲庄半分

同國六郎丸名

同國安岐郷内成久村

同國日田庄竹田別府半分

同國高國府村

同國大野庄上村半分

同國由布院並柳酒久里塚原以下所々

同國三重郷

同國大佐井郷

筑前國香椎社付諸郷

同國怡土庄

筑後國守護職

同國生葉庄

同國光吉村

同國狹間半村

同國阿南庄甲斐田村

同國武藏郷重藤久吉兩名

同國吉松名

同國長野村

同國八坂下庄若富名

同國球珠郡横尾新庄

同國高田庄

同國佐賀郷

同國小佐井郷

同國大墓村

同庄志摩方

同國鷹尾別府

同國三瀝庄半分

先祖墓所

肥後國隈牟田庄預所職付干原森崎

同國下須嶋

同國千田庄付重富永兩名

同國健軍社領

鎌倉龜谷地壹所先祖墓所宿所地等

京都佐女牛大路屋地六ヶ所

同大谷地貳所先祖墓所宿所地等

右注進如件

貞治三年二月日

同國光永吉納新開

同國合志庄

同國山本庄

豊前國山鹿西郷

加冠名字事

加冠名字事

源氏繼(大友)

貞治三年二月十二日

○義詮大友氏時ヲ筑後守護職ニ補スルコト、去年九月十二日ノ條ニ見ユ、氏繼加冠名字ノコト、便宜附收ス、

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月八日

十日、壬申光嚴天皇崩御ニ依リ、義詮、北朝ニ參内ス、

〔師守記〕

○三十九 帝國圖書館本

七月十日、壬申、天晴、

○中今夜子剋鎌倉大納言

將軍、從二位、大參内、太上法皇崩御事、爲被驚申云々、亞相衣冠、結上乘車、下懸

牛遣手二、藍狩衣、其外直垂、牛飼二人、雜色五人、赤仕丁一人、唐笠袋、先被引馬、

置鞍、次車、八葉被力者二人、雜色二人、取松明前行、次騎馬物二騎、直垂、不次佐

々、木山内判官、直垂、次近習輩廿騎許有之、次執事治部大輔、義將、次侍所土岐

宮内少輔等、執事若黨廿騎許、侍所若黨十六七騎有之、予密々相伴、助教殿縫

殿、音儒等、於姉小路東洞院見物、

（頭卷）武家申次藤中納言時光卿、主上被召御前云々、

〔東寺執行日記〕

一 七月九日、天晴、略將軍爲御訪參内云々、天下諒闇儀云

々、

阿蘇惟澄、所領所職ヲ、嫡子惟村及ビ庶子別當丸等ニ讓與ス、

〔阿蘇文書〕

先祖讓狀

讓與

嫡子宇治惟村所

肥後軍阿蘇佐助 津浦守保 豊後國大 山津守保 井頭分佐 地頭下分 郡領下分 社領下分 事領下分 先事造ス

肥後國阿蘇、健軍、甲佐、郡浦、以上四社領并矢部山、祇用、雨山、津守保、豊後國大

佐井郷半分、筑前國下座郡惣領分地頭職等事、

右惟村、（半カ）主得之嫡子也、仍爲嫡子、四ヶ社領、本家領、地頭、兼大宮司職、并當國他

國所領等、相副論旨、令旨同重代之證文等、所讓與于惟村也、爰庶子都々丞丸、

別當丸、菊池女房、仁分護所々々、仁不可成妨、凡社領者、專神事、先修造、其外所領

等者、致軍忠可知行也、右手不叶之間、依不及判形、所手印也、仍爲後代讓狀如

件、
正平十九年（朱書）手年（朱書）甲辰（朱書）印七月十日 阿蘇三社大宮司惟澄

讓與

別當丸所

肥後國阿蘇社領南鄉村々、并北郷上竹原、當時庵室禪并豊後國大佐井

郷四分一地頭職等事、

右所々讓與于別當丸者也、但可隨惣領惟村之所勘、爰南北郷村々者、社役勤

仕之地也、任先例、無懈怠勤其役、可全知行、右手不叶之間、所手印也、仍讓狀如

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十日

肥後軍阿蘇佐助 津浦守保 豊後國大 山津守保 井頭分佐 地頭下分 郡領下分 社領下分 事領下分 先事造ス

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十日

九五四

件

正平十九甲辰七月十日

阿蘇三社大宮司惟澄宋書印

置文

さためをく

おれすみか遺跡等事

みき惣領からひは男女の庶子分、面々よゆゆに状をかきをくところあり、異儀なくして知行すへし、

一八郎次郎惟武おれさけり、このあひひ代官ニたちふるものなま、あるま、これむらうちこへて、御うさよさんすといふ、そのうへにとて、これす見合顔をときさる、八郎次郎か身として、おれすみをうらむへきまあらま、又これむらかとうのなま事そや、これによて、あとの事を申をうんま、いさゝあまゝるまたうふ事、あとも、閉目をまけへきところま、いくふともあるま、しき存命のうちニ、向背まおよふあひひ、逆心をあらにしをぬ、不孝のせ見のうれうさした、しこれさけ與同れともうらみ、みあ一族、又としころれものらあり、これむらよりい、おれさけり、おれらおのま

惟武ヲ誠ム

不孝ノ罪通レ難シ

親ノ病床ヲ捨テズ、順ミズ

先非ヲ悔バシ、非ヲ悔フ

惟武與同ノモハ免シテハ、召使フベシ

か申さんするまゝあるへき仁を、これさけをとりふて、このうちをわうまゝにせんとおもひふるものともとりいさされ、おれさけおもひあへす、たやの病床を見すて、かやうのふるまいをいさむ、これいほさしく、これさけり、不孝の罪業をうくへき事ともおもえず、又此きていてふるものともい、おれら一烈列カしていていらんま、やうよき事ある、これむらま所領をあてつくる事あるま、しと思慮なくして、とりあへすいてふるあり、もしおれさけ、先非をくるて、たもひな致す事あら、おれむら扶持をくわふへきなり、さほく一腹同姓の兄弟をれをすゑく、おれらもひあひてゐるへし、

一これさけ與同のともうら此事、すゑく、れものともい、ささめてきふるへきあり、これむら免許をてめしつうふへし、張本のやうらも、追望せしめり、子細同前、

一庶子等分まわうちあまふる所々の事、かつい少分あり、又同姓一腹あり、さまたけをなすへうらま、

以前條々、大概かくのとし、このをきてをそむうい、不孝之儀さるへし、右

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十日

九五五

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十日

九五六

の手かゝりさるあひひ、手印もてゆつて状ふたふし、よてきためをくところくさんのとし、

正平十九年歲次甲辰七月十日

阿蘇三社大宮司惟澄

惟澄ノ讓狀及ビ置文ノ疑義

〔征西將軍宮譜〕

九

（朱書下同）手

惟澄か惟村への讓狀并惟武を勘當の置文等三通、い

つれもいたく心えかたし、いかにとなれば、惟村は生得之嫡子本書主得とあるは、生得と

なり、とあるは、前に見えたる子息彌太郎惟里、則今の惟村なるへければ、嫡

子なることはしるかるに、生得といひたるは、是また家督とは定め置さり

し故、今にはかに家督を定むるにつきて、生得の嫡子とは斷たるやうにて、

此生得の二字、まつ心得かたき一なり、惟村はやくより、内父に叛き、外公

にもそむきまゐらせ、父か、惟時か跡の社領社務を相續したる以前より、將

軍方に心を通して、大宮司に補せられ、肥後國守護職にまで補せられしは、

父か所領所職はさらにて、菊池か家の相傳の守護職までも奪取て、我物と

したるにて、不孝不忠、當時の風儀、大かたはかゝる事ともおほかりしかと

も、是程の不當人は、また世にもおほくはあるましく覺ゆるをや、しかるを、

惟澄か、是迄の忠誠にて、今はの際になりて、俄にかゝる不忠不孝の者を家

生得ノ二
字心得難

不忠不孝
惟村ニ
所領所職

ヲ與フル
理由ナシ

讓狀ハ惟
村ガ父後
澄ノ没後
ニ偽作シ
タルモノ
ナレバシ

督にたて、所領所職のこりなく譲り與へたるは、いかなる用意のことに
かありけん、もし病耄の所爲にあらざるよりは、真心にてしたるわざとは
おもはれざるをや、依てつらつら考ふるに、是は惟澄か没後に、惟村か父の
右の手の不叶して、執筆のならさりしを幸に、ひそかに父か讓狀をこしら
へて、後日家督相論の證據にせんとて、偽造したるものなるへし、しからず
して、もし實に惟むらかふるまひ、惟澄か置文にいふところのことくなら
んには、いかに宮の御最肩あらんにも、惟澄か跡をは、たやすく安堵仰付ら
るべきことにもあらず、また武光か、いかに烏帽子子ならんからに、日比の
忠直をすて、かゝる、不孝の人を舉達すべきことにもあらざるをや、しか
れば件の讓狀は、一定惟村か偽造したる物にして、おのれか事と、惟武か事
とを、うらうへに取かへて、まことしやかに物したるなり、されとも世の人、
惟村か兄弟の事は、おろ／＼は、かねて見も聞もして、知りたることなれば、
うつたへにそらことはかりは、書出しかたかる故、惟村か、日比父の勘當を
うけて、家督にたてられさりしことは、誰もしりたる事なる故、生得の嫡子
とかきて、其かならず家督に立へきことわりをいひ、またこれむら打越御

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十日

九五七

惟村惟澄
意ヲ軍方
將意ヲ軍方
シノ軍方
ノ將意ヲ軍方
ニシノ軍方
スルニシノ軍方
爲タ

方にさんすといふ、そのうへはとて、これすみ合顔をとけたるといひて、惟
むら父か病を聞て、是また將軍かたして、父子不通してありしかとも、前非
をくひて、惟澄か許にうち越えて、宮方に參したる故、生得の嫡子なれば、對
面して前科をゆるし家業をも譲りたるなど、其おのれか相續すまじき身
にて、父か譲りをえたるよしを、おほめかして書置たる也、また御方にさん
すといふも、宮方とも將軍方とも聞えず、何とか惟澄も、將軍方してありし
に、惟村はやむをえず、宮方にも參らす、將軍方へも付かすしてありしかと
も、かくてやみなんは、父か今はの際まで、心うくおもはん事を恐れて、心な
らす將軍方に參りたるやうに、聞えさせたる也、されは惟武父をそむきて、
病床にもより付かさりしは、宮方に心をかよはしたるにて、うはへは、日頃
勘當の惟むらに家を譲りたるを、心よからす思ひて、父の病をとほすして
ゐたるやうに書なしたる也、惟むらか、かく心をつくし、ことはをたくみに
して、後日のためとて、書置たる物なりしかとも、とても惟村兄弟か、日來の
所行は、うちくのひきか事にはあらで、世にあらはれて、おほひかくさる
へきこともあらず、其上惟澄か自筆のものにもあらされは、いかにいつは

後日ノ證
シ左ニハナ
シ難シ

惟武惟村
ノ相傳文
書ヲ抑留
セシコト
ヲ訴フ

惟兼惟忠
所領ヲ爭
ヒ京都ニ
訴フ

度々ノ訴
訟ニ此讓
狀ヲ出サ

惟武ノ怠
狀

りこしらへたりとも、とても後日の證左にはしかたかりしものなるゆゑ、
惟むら一たんは、此讓狀とも書きて、世を欺かんとおもひしかとも、後には
みつから、其詮なき事を悟りたる故人にも見せず、其まゝにうち捨置たる
か、不思議に散失すして、今まで残りたる也けり、もし惟澄か本心にて、かく
委しく定置たる事ならんには、間近く正平廿四年に、惟むらか相傳文書を
抑留したるとて、惟武か訴たるをりに、惟村、此讓狀とも出して、證とせんに、
いかに惟武かよこしまなりとても、争ふへきことはあるへからず、また其
後にも、應永三十一年に、惟武か孫惟兼と、惟村か孫の惟忠と、所領の事を争
論して、京都に訴訟したるをりも、惟忠、此讓狀を出して訴たらんには、是ま
た惟兼もあらそふことはあるまじく、惟忠たやすく訴訟に勝つへきこと
なるに、度々の訴訟に、一度も此讓狀をは出さずして、京都にてつひに、明白
の御裁判なくして、結局双方和睦して、事濟たるにて、いよいよ此讓狀は、惟
むらか偽造したる物なることさたかなるへし、また阿蘇文書に、
せんとのふるまひは、御免かふむるへく候、
一きやうこうにおき候て、われとしても、人をもても、いさゝかふちゆうは

らくろのきあるましく候、
一きよひをそむき申ましく候、
一かやうに申入候うへは、けうかいをも、もちい申ましく候、うけ給候事候
は、いそきく申入候へく候、もしこのてう、いつはり申入候は、大み
やうしんの御はつを、まかりかふふるへく候、せいもんの状くたんのこ
とし、

三月十八日

といふ惟武か怠状あり、宛所なければ、誰に出したるともしらねとも、惟澄
は今年の八九月の間に、身まかりたりしと見えたるに、此状は三月とあれ
は、明るとしの三月にて、惟むらにつかはしたるものなるへし、されとも、是
も前の讓状と同時に、惟村か偽造したるにて、そは後の惟むら、事を訴へた
る事あるにてきたかなり、また讓状には、都々丞丸、別當丸と、兄弟の名を出
したるに、庶子への讓状には、兄の都々丞丸か事見えざるは、都々丞丸へと、
菊池の女房へとの讓状は、後に散失たるなるへし、菊池の女房とは、惟澄か
後妻にて、菊池家より迎へたりしか、都々丞と、別當と、此腹にてありし故、先

惟澄ノ後妻

七八月ノ交ニ卒ス

家系及ビ傳記

北條氏ヲ討ツ

妻の子惟むら、惟武か事をは、一腹同姓とはいひたると見えたり、菊池の女
房は、誰か女なりしにや、さたかならず、件讓状の事につきては、猶後にいふ
事あれば、こゝにはまつ其帳本はかりをいふ也、上略
○懷良親王、阿蘇惟武ニ、惟澄讓與ノ所領ヲ安堵セシメ給フコト、十月
十九日ノ條ニ見ユ、惟澄ノ事歴、便宜左ニ附收ス、
〔征西大將軍宮譜〕九 惟澄か讓状は、七月に書たるに、惟澄か遺跡相續事、
十月に言上したれば、惟澄は七月の末か、八月の初に身まかりて、惟武五十
日の服暇をすみて後に、遺跡の事言上申たると見えたり、上略

〔阿蘇家譜〕六

惟直

惟澄 初、惠良小次郎ト稱ス、後任筑後權守輔守、又兼日向吏務、惟澄未タ其出
所ヲ詳ニセス、征西將軍譜曰、攝職以前ノ上書ニモ、亦大宮司小次郎ト
稱ス、即其父ノ大宮司タル疑ナシ、然則惟景
或ハ惟國ノ子ナルヘシト、是説ニ似タリ、

初、大塔宮ノ令旨ヲ奉シ、惟直ニ從テ兵ヲ起シ、北條氏ノ黨ヲ討テ功アリ、
延元々々年二月、筑前國有智山ノ合戦ニ功アリ、○延元元年二月二日、尊氏東
上ノ後、賊軍國中ニ充斥ス、此ヨリ嚮キ、大宮司惟直、尊氏ト筑前多々良濱

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十日

九六一

大宮司ヲ
攝ス

義詮肥後
守護職ヲ
以テ招誘
スレドモ
應セズ
大宮司ト
ナル

ニ戰テ敗死シ、前大宮司惟時猶京師ニアリ、惟澄留守ノ寡兵ヲ以テ、其間ニ縱横馳驅シ、荐ニ戰功ヲ建ツ、後征西府ヲ賜フテ、褒賞一ナラス、往々忠勇義烈拔群ノ語アリ、興國四年、惟時叛ク、宗族皆從フ、惟澄獨守節、諸弟及上嶋惟賴等ヲ督メ、義ヲ甲佐城ニ唱フ、一族亦稍ク來歸ス、南朝終ニ惟澄ヲメ、大宮司ヲ攝セシム、日向ノ吏務ヲ兼ヌ、按スルニ、文中三年六月、惟澄國司補任先年給旨可執務云々、蓋シ此ヲ指スカ、抑又別ニ初惟時ノ叛ク、惟澄屢大義ヲ以テ諫レ、斥不可、不得止、或ハ兵威ヲ以テ之ニ逼リ、或ハ利害ヲ勸解シ、凡ソ五六年間多方周旋シ、正平五年、惟時終ニ惟澄ニ因テ歸順ス、惟澄悉ク其管攝スル所ノ土田ヲ還シ與ヘ、其已ニ入ル者幾許クナケレ、敢テ顧ミス、共ニ力ヲ王室ニ盡ス、惟時亦惟澄ノ子惟村ヲ養フテ嗣トス、既ニノ惟時卒メ、惟村猶幼シ、惟時ノ遺臣、又惟村ヲ擁メ、十五年、終ニ北朝ニ降ル、惟澄之ヲ絶ツ、十六年、足利義詮、惟村ニ媒シ、惟澄ヲ招ク、餌スルニ肥後守護ヲ以テス、○正平十六年二月二日ノ條ニ見ユ、惟澄應セス、十六年、南朝終ニ惟澄ニ勅メ、大宮司トシ、以テ惟時ノ後ヲ承シム、○正平十六年二月十八日ノ條ニ見ユ、十八年、惟澄深ク大友氏ノ内地ニ入、所々ノ城ヲ追落シ、○正平十六年二月十八日征西府所賜ノ旨

少ヨリ心
ヲ王室ニ
致ス
勇武絶倫

ルニ據テ、兵威復稍振フ、十九年、惟村終ニ降ラ乞ヒ、矢部城ヲ出テ、甲佐ニ來リ、順ニ歸ス、惟澄病ム、即チ職ヲ惟村ニ讓ツテ卒ス、凡ソ惟澄少キヨリ心ヲ王室ニ託シ、勇武絶倫、能ク以寡擊衆、強寇ヲ却ク、生涯ノ功勳勝テ算フヘカラス、其最モ大ナル者ハ、延元二年、犬塚原ノ戰ヒ、菊池武重相共ニ敵將一色範行ヲ破テ、其弟賴行ヲ斬ル、○延元二年四月十日ノ條ニ見ユ、興國二年、我族人坂梨孫熊、足利氏ノ命ヲ以テ、別ニ大宮司トナリ、南郷城ニ據ル、惟澄之ヲ攻ム、肥後豊後ノ群賊來リ援フ、惟澄半途ニ邀ヘ撃ツ、而モ衆寡敵セス、戰最モ苦シム、惟澄弟與惟賢共ニ創ヲ被リ、馬斃テ徒步奮戰シ、終ニ之ヲ破テ、次日其城ヲ拔キ、孫熊以下六十餘人ヲ斬ル、○興國二年八月二日ノ條ニ見ユ、三年、守富ノ戰、三條少將マサニ敗レントス、惟澄生兵ヲ以テ代テ進ミ、闇夜昏黑縱横馳突、終ニ一色水垂入道ヲ破ル、○延元二年六月二日ノ條ニ見ユ、又曾テ延元中、少貳頼尙大兵甲佐城ヲ來リ圍ム、惟澄纔ニ死士三十人ヲ撰ンテ、門ヲ開キ出テ戰ヒ、頼尙終ニ引テ還ル、○延元三年十月二日ノ條ニ見ユ、後又頼尙ヲ破ツテ、高木兄弟弓削丹波以下數十人ヲ斬リ、馬物具ヲ追落シテ、相嶋大渡川ヲ追渡スナト、○正平元年閏九月二日ノ條ニ見ユ、凡身ヲ終ルノ間、愷ノ勞殆ント虚日ナシ、其正平三

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十日

九六四

年ノ申狀ヲ見ルニ、大小戰數百度、所殺ノ賊千ヲ以テ算フト、○正平三年、但見條ニ、但惜ムラクハ、此申狀ニテ、正平三年マテノ武功ハ明ラカナレト、興
(備前カ)シキ武功ナルニ、適此申狀ニハ漏サレタリ、カ、ル類ノ事外ニモ有ケン、
其後十六年間ノ事ハ、纔ニ一二ノ繪旨、令旨、或ハ註進狀等ノ斷簡遺篇ニ
徴スルノミニテ、其顛末ヲ詳ニスル事能ハス、憾ムヘキナリ、○下

正平四年
以後ノ傳
記明カナ
ラズ

惟村

惟武

惟重

都々丞丸

別當丸

〔阿蘇三社大宮司系圖〕

惟時

惟澄

惟村

〔阿蘇家譜〕

五

大宮司職
系

申狀

追言上、

惟澄此間合戰之次第、同注進候、此外肥後國菊池本城、當時合志入替武
士令楯籠、去ル十五日、武光令發向、追落外城燒拂、打取凶徒廿餘人、同
十六日、追落隈部城、筑後國吉木一族等、去年屬朝敵、引入冬綱代官楯籠
之、去八日夜、當國官軍寺尾八郎相談、光五郎三郎永宗打入彼城、討取守
護代薩摩孫三郎男了、新田宗覺手物、黒木西智手物等、同十六日、凶徒元
吉城引退了、筑後肥後當時令對治所々候、追可言上候、恐惶謹言、

右副書一篇、吉野へ訴し申狀おとの追啓とよゆれと、いつ頃の物とも今詳
ならに、但正平ころの物と見ゆとも、同三年の軍忠申狀、此役の事露ハ
りり不見り、其後のものなふへし、先人の、筑後肥後處々退治の文よりて、
上篇より出さる頼元書翰、八月十日、小國退治返々目出候云々、肥後筑後之間、相
構而可有御越云々とあると、同時の物よりあらしやとの考あり、又正平四
年十一月八日、勘解由次官奉の、爲對治菊池本陣凶徒馳參云々とある令旨
も、似つうはしき處あり、併見へし、か程の武功、此斷簡一篇のまよて、外
考ふる所なれり、年月さへささうあらに、かうやうはもの猶いくらうあ

吉野ヘノ
申狀ナラ
ン正平四年
以後ノモ
ノナラン

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十日

九六五

月二十四日ノ條ニ、北黨筑後三郎ト肥後三船城ニ戰フコト、同六年十月十六日ノ條ニ、八代合戰ニ合力セシコトヲ褒セラレ、コト、正平二年正月八日ノ條ニ、筑後權守ニ任ゼラル、コト、同三年三月十八日ノ條ニ、懷良親王ノ旨ヲ奉ジテ籌略スルコト、同年十一月二十八日ノ條ニ、書ヲ五條賴元ニ遺リ、重ネテ日向守護職及ビ將士恩賞等ノ事ヲ請フコト、同四年九月十八日ノ條ニ、日向吏務職ヲ管領スルコト、同年十月五日ノ條ニ、日向高知尾ノ輩ヲ率井テ菊池ニ赴キ、合志幸隆據ル所ノ城ヲ攻メ、之ヲ陷ル、コト、同五年三月十二日ノ條ニ、戰功ヲ褒セラレ、コト、同七年九月八日ノ條ニ、懷良親王、惟澄ニ、肥後守富莊半分地頭職ヲ賜フコト、同十四年二月十五日ノ條ニ、懷良親王、惟澄ニ、其領地ニ就イテ、明年正月沙汰スベキ旨ヲ告ゲ給フコト、同十五年十二月二十五日ノ條ニ見ユ、

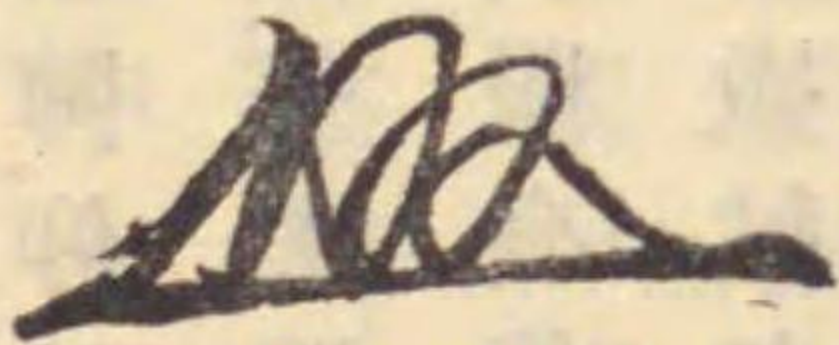
〔參考〕

〔花押彙纂〕

部ア之 阿蘇惟澄



○阿蘇文書(肥後) 興國七年四月八日注進狀



○阿蘇文書(肥後) 正平五年八月十四日申狀

十一日、^{西、癸}北朝光嚴天皇遺詔奏アリ、是日、固關警固及ビ廢務ヲ宣下セラル、

〔迎陽記〕

○德川昭武氏本 七月十一日、晴、今日遺詔奏也、上卿^(細原忠光)右衛門督參陣、^(端座)遺詔使前宮内平惟清朝臣、參左衛門陣外、大外記師^(茂力)義朝臣出逢陣外、惟清朝

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十一日

葬官及山陵前等遺詔

宴飲作樂美服ヲ著スルコトヲ停止ス

任葬官チ略ス

嗣房遺詔奏固關警固ノ事ヲ

臣傳遺詔旨(次カ)弘大外記使不待御返事師茂朝臣參軾申遺詔旨次上卿招職事、奏云、前長門守朝臣惟清申云、太上法皇遺詔云、葬官并素服舉哀、山陵荷前等、宜被停止、職事嗣房參御前奏聞歸出、仰云、聞食、次上卿召外記仰此由、次職事出陣、仰云、固關警固事、又自今日廢務五ヶ日、次上卿召辨嗣房、仰云、三關警固付司、辨於腋陣、仰史、上卿令少外記良種召內豎、召諸衛、々々右中將隆廣朝臣、藏人左衛門尉、列立、仰警固事、次職事出陣、仰云、依遺詔、葬官并素服舉哀、山陵荷前等可停止、兼刻一井之旨、宴飲作樂、著美服令停止、次上卿召大外記、下知宣下旨、次召辨素服舉哀、宴飲作樂、著美服令停止、可被仰一井字、如次辨仰史、其儀、如前、次上卿、召大外記、仰廢務事、次上卿撤軾起座云々、後日嗣房參殿中語申此分畢、十二日、晴、當番之間、早旦參殿中、晚頭嗣房參仕、去夜宣下儀等申入殿下、仰云、任葬官事、葬禮已後宣下、背其理、雖以前、猶以無其宣下、旁於今度者、云、延久之例、可被略事也、一向右衛門督申沙汰云々、強又不可為巨難歟、

〔師守記〕

三十九帝國圖書館本

七月十日壬申天晴

略中今日藏人右中辨嗣房

尋申云、其後何條御事候哉、此御事尙々非言詞所為候、亮陰事申沙汰、邂逅事粉骨無術候、抑遺詔奏事、相觸御教書之條候者、撰給候哉、固關警固事案、同不

師茂ニ問フ

隆家ノ書

師茂ノ返

審候、無所見候之間、尋申、中被答云、悅奉候了、法皇御事殊驚存候外、無他候、亮陰事申沙汰之御計會奉察候、抑遺詔奏并固關警固事、御教書無所見候、下略

十一日、癸酉、天霽、略中今日藏人右中辨嗣房觸申局務云、昨日明日可有宣

下事、任例可被致沙汰云々、禮紙云、遺詔奏廢朝以下可有其沙汰、可被存知也

云々、則被出請文、又被下知文殿、恐可相觸一薦外記康隆之由被下知之、

今日助興來云、代助豐今夕遺詔奏六位外記事、相觸一薦之處、此間眉邊有蚊觸

事、難參陣之由令申之間、相觸四薦外記良種之處、被申領狀云々、中今日四

條中納言隆家卿進狀於局務云、

昨日參伏見殿被申趣、且申入了、中今夕遺詔奏必定候哉、謹言、

隆家

返事注左、

昨日御參伏見殿之由承悅仕候、中今夕遺詔奏事、只今御教書到來候、定

被行候歟、每事可參入言上候、師茂恐惶謹言、

師茂 狀

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十一日

九七二

入夜家君著朝衣垂纓、參陣給、依可有故院遺詔奏也、左大史重實（兼力）、垂纓、權少外
記清原良種參陣、

上卿權中納言藤原忠光卿右衛門督卷纓、奉行職事藏人右中辨同嗣房垂纓、等也、內

豎川康秀同參之、本所使前長門守平惟清朝臣束帶卷纓、參門外、

固關警固被仰之、廢務五ヶ日、任葬官并素服舉哀、山陵荷等（前股力）可停止、兼又燕飲

作樂、著美服事、宜令停止之、由被仰辨、先例每度一井之間詞有之、今度略一井

云々、尤不審、丑剋事了家君退出賜、

（頭書）今日以狀遺詔奏廢朝以下事、今夜可被行、條々可注觸之間、被尋藏人右中

辨嗣房之處、返事勘付之、狀已下注裏、

（渡書）明日可有宣下、任何可被致沙汰狀如件、

七月十日

右中辨嗣房

四位大外記殿

追申

遺詔奏廢朝以下、可有其沙汰候、可被存知也、

今日可有宣下事、任何可致沙汰候、由、可存知候、仍言上如件、

七月十一日

大外記中原師茂 狀

追啓

遺詔奏廢朝以下、可有其沙汰候之由、可存知、恐々謹言、

內豎可參之由、同可被相觸也、恐相觸一薦外記、今間可被申散狀候、由其

沙汰候也、

今日可有遺詔奏廢朝以下事、任何可被致沙汰候、樣、依仰執進如件、

七月十一日

延兼

外記文殿

何等御事候哉、

抑今日可有遺詔奏廢朝以下事之由、御教書到來之間、加下知候了、今夜可

被行條々、爲存知可蒙仰候、兼又今度亮陰事、陰陽寮清周朝臣、可注進候、歟、

蒙仰候者、畏入候、每事期參入之次候、恐惶謹言、

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十一日

九七三

何等御事候哉、

抑今日可有遺詔奏廢朝以下事之由、御教書到來之間、加下知候了、今夜可

被行條々、爲存知可蒙仰候、兼又今度亮陰事、陰陽寮清周朝臣、可注進候、歟、

蒙仰候者、畏入候、每事期參入之次候、恐惶謹言、

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十一日

九七三

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十一日

七月十一日

春日殿

師茂 狀

九七四

十三日、乙亥、天晴、申剋已後雷鳴、南方、略、中今日和布二帖、被志遣權帥仲房卿、本意之由有返事、此次一昨日遺詔奏不審條々、注折紙、被尋子息藏人右中辨、嗣房之處、委細注進之、略、中返事自是可申云々、

先日遺詔仰詞以下事、折紙一枚進上仕候、被注下候者、畏入候、輕服人賜素服例、雖引勘候、所見不詳、略、中每事可參入言上候、師茂恐惶謹言、

七月十三日

人々御中 右衛門督忠光卿

師茂 上

折紙
一 今度本家使申詞師茂申入之後、以職事御奏聞御申詞、
一 固關警固事、職事申上卿仰詞、
一 同事、上卿被仰辨仰詞、

師茂遺詔
不審ノ
奏々
房ニ
問フ

一 上卿被仰外記仰詞、山陵荷前任葬官遺詔、可令停止、如此候歟、
一 素服以下停止事、被仰辨仰詞、
一 廢務事、被仰外記之仰詞、自今日五ヶ日廢務、如此候歟、
一 夜參會恐惶候、

抑遺詔奏之時、仰詞以下不審事、一紙注進候、被勘付者畏存候、每事可參啓候、恐惶謹言、

七月十三日

春日殿

師茂 狀

折紙
一 本家使申詞外記申渡、上卿奏聞申詞事、
一 固關警固事、被仰上卿仰詞事、
一 同事、上卿被申辨仰詞事、
一 本家使申詞、上卿奏聞後勅答事、
一 素服以下停止事、上卿被申辨仰詞事、

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十一日

九七五

- 一同事辨被仰量實仰詞事(小欄)
 - 一廢務事職事被仰上卿之仰詞事
 - 一任葬官素服舉哀山陵荷前停止事職事被仰上卿仰訪事(詞九)
 - 一固關警固并任葬官以下廢務以上三ヶ條別々被仰上卿歟事
- 本家使國司若承誤候歟

嗣房ノ返
 狀ノ事
 今度ノ事
 上卿ノ命
 ハ一向ニ
 シ隨フベ
 太法皇
 ノ字ヲ略
 スルコト
 ハ尤不審

遺詔奏條々一紙注付候任葬官以下仰詞事今度可爲何様哉之由尋申關
 白候之處委細被仰右衛門督ツ可談合之由被仰候之間今度事一向隨上
 卿命候了條々停止仰詞事延久建久依太上法皇遺詔ト仰候歟今度被略
 太上法皇字候尤不審候先例候哉且此次可仰警固并廢務事而隨上卿命
 兩度ニ仰候了先規同不審候兩條所見候者以便宜可注給候所詮條々隨
 上卿之命候了爲御不審委細令申候如然事猶期面候謹言

七月十三日

嗣房

折紙

一本家使申詞上卿奏聞申詞事

太上法皇遺詔使前因幡守平朝臣惟清申云遺詔云任葬官并素服舉哀
 山陵荷前等可被停止

- 一固關警固事仰詞事
- 三關警固付國司
- 一遺詔奏勅答仰詞事
- 聞食ツ

- 一廢務事仰詞事
- 自今日廢務五ヶ日
- 一任葬官以下停止仰詞事
- 依遺詔任葬官并素服舉哀山陵荷前等可停止兼又一基之間燕飲作樂
 著美服事宜令停止
- 一固關警固并任葬官以下停止事兩度被仰事廢務事警固事仰之次同仰
 了任葬官以下停止事今度更仰了
- 一素服以下停止事上卿仰辨仰詞事
- 素服舉哀一基之間燕飲作樂著美服事可停止

一辨仰史事、

仰詞同前也、

一警固事、上卿仰辨仰詞事、

職事仰詞同前也、

十四日丙子天晴、略

渡御倚廬行事、カ、ル、本月二十六日ノ條ニ收ム、略謹言、

七月十四日

嗣房

四位大外記殿

私申

遺詔奏條々、昨日御不審一昏、委細注付了、素服以下停止事、上卿仰辨仰詞、素服舉哀、燕飲作樂、著美服事、可令停止、如此候き、略一拜之間候了、昨日若注誤候歟之間、令申候、

〔續史愚抄〕

後光嚴院下

七月十一日、癸酉、故院遺詔奏、上卿右衛門督、忠光

使前宮内卿惟清朝臣、或作前長門守、惟信朝臣、言、任葬官、素服舉哀、山陵荷前等可停止、兼又一期間、宴飲作樂、著美服事等可停止、由宣下、奉行藏人右中辨嗣房、師夏記、後愚昧

記追、七、安

十二日、甲光嚴天皇崩御ニ依リ、北朝前關白九條經教參内ス、

〔師守記〕

三十九 ○帝國圖書館本

七月十二日、甲戊、天晴、申剋雷鳴、酉剋又雷鳴、入

夜戊剋雨下則止、略

（前卷） 今度九條前殿下、爲御訪御參内云々、

十八日、庚辰、法印權大僧都經深、坊舍所領本尊聖教道具等ヲ、僧都隆源ニ讓與ス、

〔三寶院文書〕三十 ○山城

讓與

坊舍所領本尊聖教道具等事

合

報恩院 本尊聖教道具所

蓮藏院 子細同上

釋迦院 在坊舍佛閣本尊聖教并所領

盛林院 廻祿跡

報恩院
蓮藏院
釋迦院
盛林院

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十二日 十八日

淨土院
犬懸坊

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十八日

九八〇

禪林寺淨土院 祖師墳墓地、在置文以下寺田左目貝田等、
鎌倉犬懸坊舍所領

右院家所領并本尊聖教道具以下、代々讓狀、院宣等明白也、且當流嫡々相承之趣、勅書并院宣等、異于他者歟、而今相副彼讓狀以下、悉所讓與于隆源僧都也、致公家武家之御祈禱、可被專當流烈祖之報恩、偏是可爲鎮守三寶之奉公者也、更他人不可有其妨之狀如件、

貞治三年七月十八日

法印權大僧都(花押)

〔三寶院文書〕

〇山城 第二回探訪

(編纂者)

犬懸坊地 付坊領、相傳次第

鎌倉犬懸坊 付坊領、相傳次第 〇中

隆源大僧正 (龍泉) 同寺報恩院 同(鏡水本坊)

貞治三年七月十八日師匠經深讓 〇下

〇經深、祕事口決及比本尊聖教道具等ヲ隆源ニ授クルコト、三月十四日ノ條ニ、勝俱胝院ヲ隆源ニ讓リ、九條經教、其管領ヲ認ムルコト、八月

一日ノ條ニ、經深ノ寂スルコト、同月十四日ノ條ニ見ユ、

大日本史料 第六編之二十五終

南朝正平十九年 北朝貞治三年七月十八日

九八一

大日本史料第六編之二十五

昭和六年二月十四日印刷
昭和六年二月十六日發行

(大日本史料第六編之二十五奥付)
豫約價金七圓

著作
權有

編纂兼
發行所
東京帝國大學

印刷者
株式會社
開明堂

發行所
東京帝國大學
文學部
史料編纂所

本店 濱松市元城町一七三番地
支店 東京市神田區表猿樂町二番地
(電話小石川(85)七〇二番)

寄韻

寄贈

170



辛巳六月廿六日

東京帝國大學

東京帝國大學

東京帝國大學

東京帝國大學



